大東市埋蔵文化財調査報告第19集

元粉遺跡 I

―大阪産業大学桐蔭高等学校校舎建設に伴う発掘調査報告書―

２００４年３月

大東市教育委員会

大東市埋蔵文化財調査報告第19集

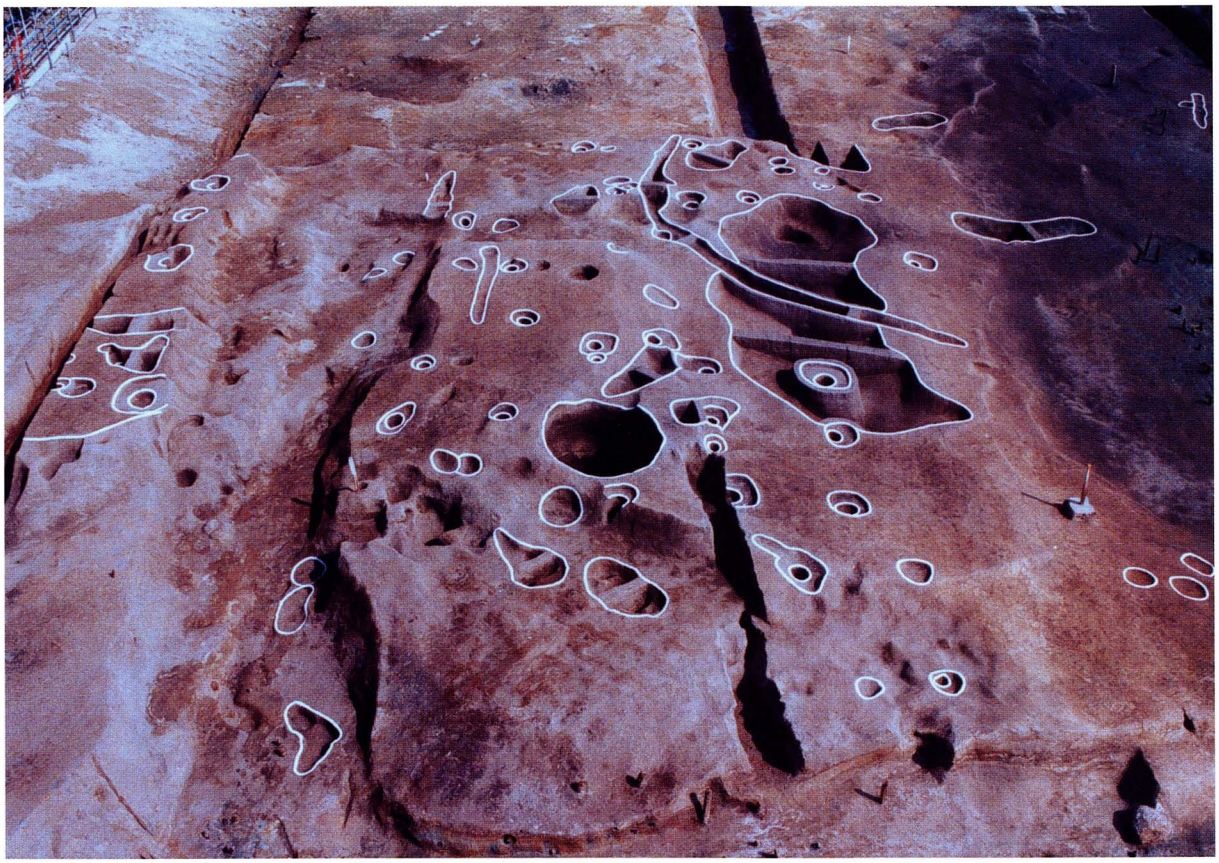
元 粉 遺 跡 I

―大阪産業大学桐蔭高等学校校舎建設に伴う発掘調査報告書―

２００４年３月

大 東 市 教 育 委 員 会

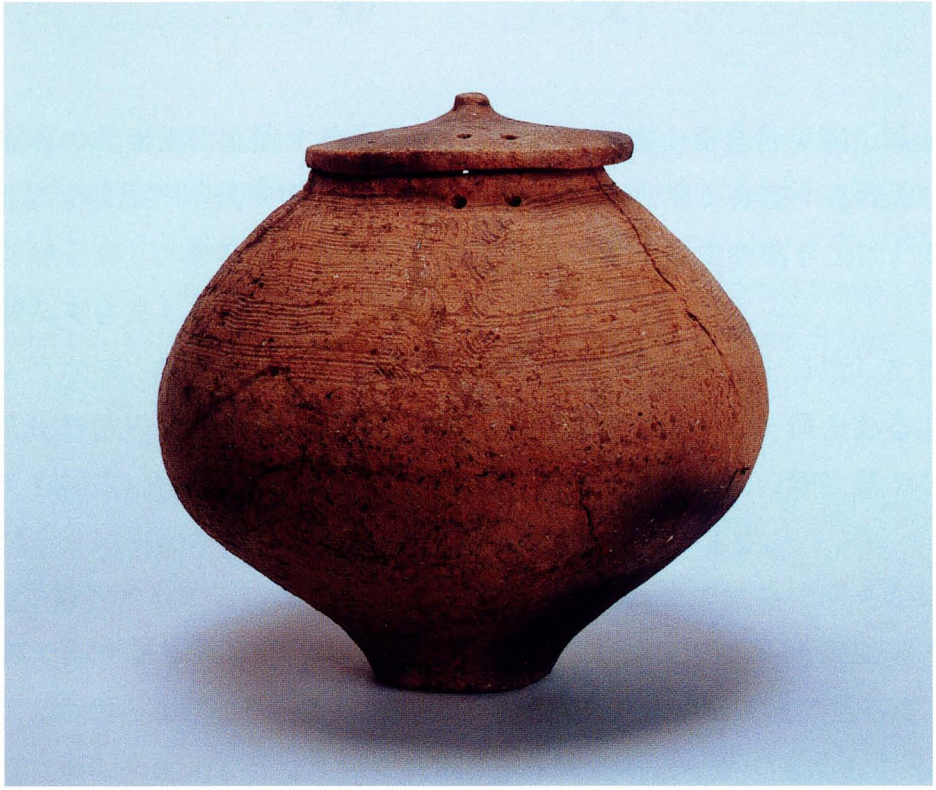
巻頭カラー図版1



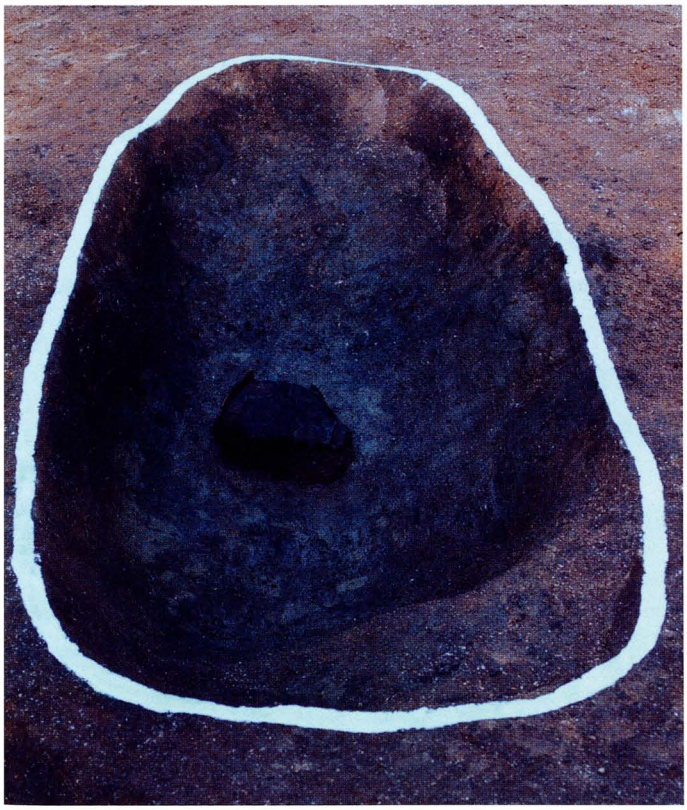
1．第２遺構面

2．ＳＥ－２０１

巻頭カラー図版2



1．第Ⅷ層出土土器



2．ＳＫ－２１１（南より）

3．ＳＫ－２１１出土土器

序　　文

大阪府の北東部に位置する大東市は、東部に飯盛山を含む生駒山系が南北に連なり、西部では江戸時代中頃まで深野池という大きな池が存在するなど、古来より豊かな自然を有し、そのような環境のもと地域特有の歴史を築き上げ、また豊かな文化を育んできました。

そのような中、本市では歴史、芸術、学問など文化の創造を目指した都市として様々な文化行政の推進に取り組んでいるところですが、その一環である文化財につきましても幅広い保護と公開・活用を図ることにより、地域の個性豊かな歴史文化をまちづくりに生かすべく努力しているところでございます。

この度、報告することになりました元粉遺跡はこれまで性格の明らかにされていない遺跡でありましたが、今回の発掘調査により縄文時代から近世に至る複合遺跡であることが明らかとなり、特に、弥生・古墳時代から奈良時代に至る集落跡の発見は古代の大東市を復元するうえで、貴重な成果を得ることができたと考えています。

今後、これらの成果を市民共有の財産として公開・活用していくとともに、本報告書が本市の歴史や文化を知る基礎資料として活用いただければ幸いに存じます。

最後になりましたが、発掘調査および整理作業の費用負担をはじめ多大なご協力を賜りました学校法人大阪産業大学をはじめ、関係機関・各位に厚くお礼申し上げます。

また教育委員会では先人より受け継いできた貴重な文化財を大切に保存し、未来を担う次世代に託したく努力する所存でありますので、市民の皆様方におかれましては今後とも本市の文化財保護行政にご理解、ご協力賜りますよう心よりお願い申し上げます。

平成16年３月

大東市教育委員会
教育長　中　口　　馨

例　　言

1．本書は、大阪府大東市中垣内３丁目における元粉遺跡発掘調査（ＭＴＫ９１－１）の報告書である。

2．調査は大阪産業大学桐蔭高等学校校舎建設に伴うもので、大阪産業大学より依頼を受け、大東市教育委員会が実施した。

3．発掘調査及び整理作業は大東市立歴史民俗資料館、中逵健一が担当した。
調査期間、調査面積等は本文中に記載している。

4．本調査に係る費用については大阪産業大学がこれを負担した。記して感謝の意を表する。

5．発掘調査および報告書作成の過程で、下記の諸氏よりご助言、ご教示を賜った。記して感謝の意を表する。（敬称略、順不同）

宮野淳一（財団法人大阪府文化財センター）、濱田延充（寝屋川市教育委員会）、田部剛士（山添村教育委員会）、大野　薫（大阪府教育委員会）

6．現地調査、整理作業にあたっては下記の諸氏の協力を得た。（敬称略、五十音順）

［現地調査］

大谷聡、喜多祐子、佐久間千代子、森田耕司、森本祥裕、野村直史、山崎明子、山田芳樹

［整理作業］

大谷聡、喜多祐子、佐久間千代子、谷崎光子、樋口里美、宮田八重子、森田耕司、森本祥裕、野村直史、山崎明子

7．本調査における基準点、水準点測量は横守調査測量事務所に委託した。

8．報告書作成に係る一部図面作成、出土遺物一覧表作成、遺物写真撮影については、大東市教育委員会の指導のもと財団法人元興寺文化財研究所に委託した。

9．本書の執筆、編集は中逵が行った。

10．本調査に関わる遺物、実測図、写真、カラースライド等は大東市立歴史民俗資料館において保管している。広く利用されることを希望する。

本　文　目　次

序　文
例　言
第１章　調査に至る経緯 …… 1
第２章　遺跡の位置と環境 …… 2
第３章　調査の方法 …… 5
第４章　調査成果
　第１節　基本層序 …… 6
　第２節　第１遺構面 …… 12
　第３節　第２遺構面 …… 13
第５章　まとめ …… 25

挿　図　目　次

第１図　調査地位置図 …… 1
第２図　大東市位置図 …… 2
第３図　周辺遺跡分布図 …… 4
第４図　調査区区割図 …… 5
第５図　調査区南壁断面図 …… 7
第６図　調査区北・西壁断面図 …… 8
第７図　第Ⅷ層遺物出土状況図 …… 9
第８図　包含層等出土遺物（１） …… 9
第９図　包含層等出土遺物（２） …… 10
第10図　包含層等出土遺物（３） …… 11
第11図　包含層等出土遺物（４） …… 11
第12図　第１遺構面全体図 …… 12
第13図　第２遺構面　溝（ＳＤ）断面図 …… 13
第14図　第２遺構面　溝（ＳＤ）出土遺物 …… 13
第15図　ＳＫ－２１１平・断面・遺物出土状況図 …… 14
第16図　第２遺構面全体図 …… 15・16
第17図　第２遺構面　土坑（ＳＫ）平・断面図 …… 17
第18図　第２遺構面　土坑（ＳＫ）出土遺物 …… 18
第19図　ＳＥ－２０１平・断面・遺物出土状況図 …… 19
第20図　ＳＥ－２０１出土遺物（１） …… 20
第21図　ＳＥ－２０１出土遺物（２） …… 21
第22図　ＳＸ－２０１平・断面図 …… 22

第23図　ＳＢ－２０１平・断面図 …… 23
第24図　ＳＢ－２０２平・断面図 …… 23
第25図　ＳＢ－２０３平・断面図 …… 24
第26図　第２遺構面　不明遺構（ＳＸ）・掘立柱建物（ＳＢ）・柱穴（ＳＰ）出土遺物 …… 24

表　目　次

出土遺物一覧表 …… 29～32

写真図版目次

巻頭カラー図版１
　１．第２遺構面　　２．ＳＥ－２０１
巻頭カラー図版２
　１．第Ⅷ層出土土器　　２．ＳＫ－２１１（南より）
　３．ＳＫ－２１１出土土器
図版１　遺構(1)
　１．第１遺構面全景（北西より）　　２．ＳＤ－１０１北側（西より）
　３．ＳＤ－１０１南側（北西より）　　４．ＳＤ－１０１内　杭列
　５．ＳＤ－１０１内　石列
図版２　遺構(2)
　１．第２遺構面全景（西より）　　２．ＳＫ－２１１（南より）
　３．ＳＫ－２１１遺物出土状況（東より）
図版３　遺構(3)
　１．ＳＥ－２０１（北より）　　２．井戸枠内遺物出土状況①
　３．井戸枠内遺物出土状況②　　４．井戸枠内遺物出土状況③
　５．井戸枠内完掘状況
図版４　遺構(4)
　１．ＳＢ－２０１・２０２　　２．ＳＢ－２０３
　３．弥生土器（無頸壺）出土状況（東より）
図版５　出土遺物(1)
図版６　出土遺物(2)
図版７　出土遺物(3)
図版８　出土遺物(4)
図版９　出土遺物(5)
図版10　出土遺物(6)

第１章　調査に至る経緯

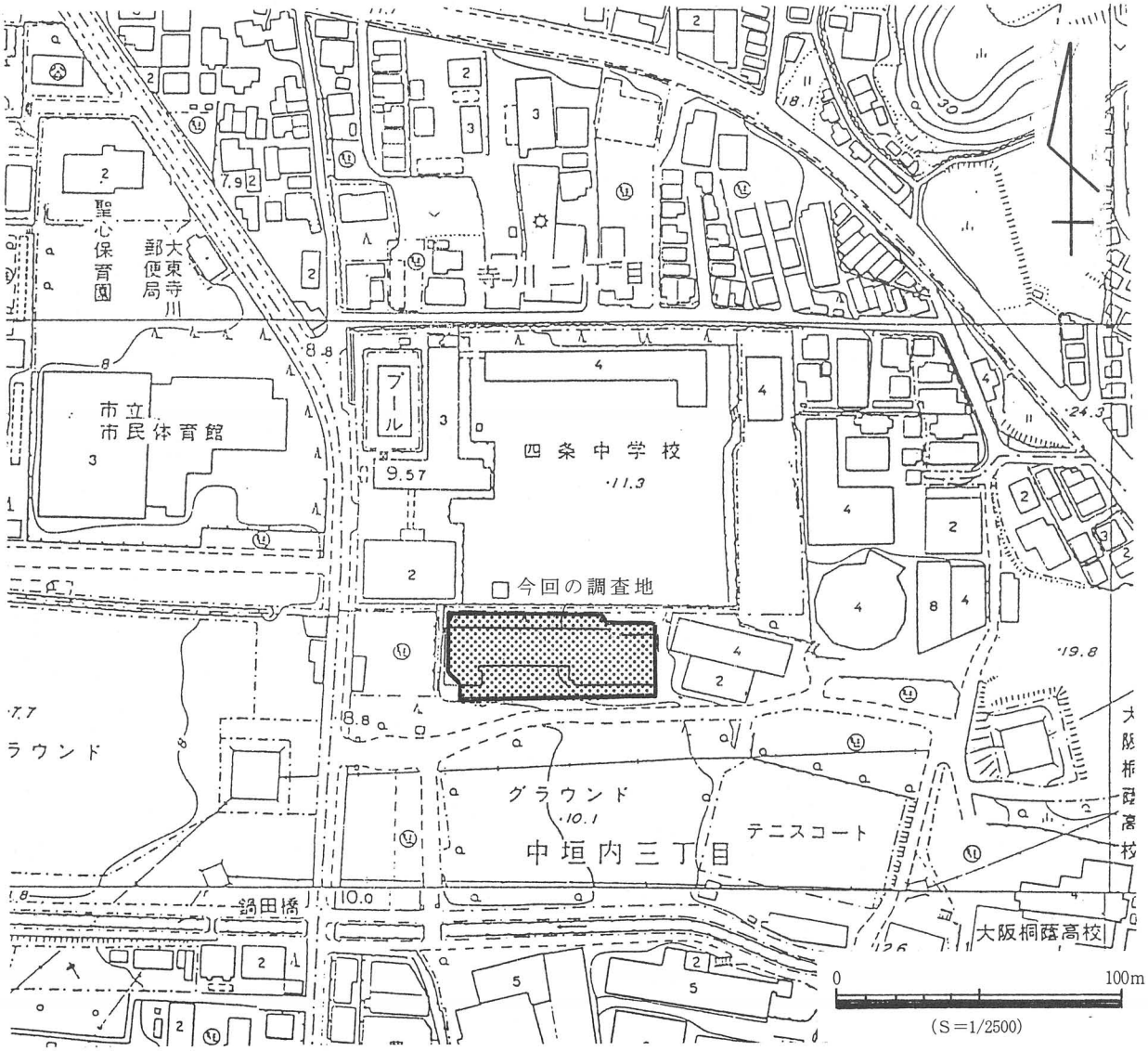
元粉遺跡は中垣内３丁目一帯に所在し、南北140m、東西160mの範囲を持つ遺跡と考えられている。しかし、今日まで遺物散布地として周知されていたため、その実態については明らかにされていなかった。

そのような状況下、学校法人大阪産業大学より大阪桐蔭高等学校校舎建設の計画がなされた。計画地は元粉遺跡の範囲内であったため、事務的手続きを経て、平成３年５月14日に大東市教育委員会が範囲確認調査を実施した。

結果、遺構および包含層が確認されたことにより、遺跡の取り扱いについて保存協議を行ったが、計画の変更は困難であるとのことから発掘調査が必要との結論に至った。

その後、調査の実施に関して更なる協議を重ねた末、学校法人大阪産業大学から依頼を受けたことにより、大東市教育委員会が実施する運びとなった。

調査は計画地1675㎡を対象に、平成３年11月11日より着手し平成４年３月３日に終了した。



第１図　調査地位置図

第２章　遺跡の位置と環境

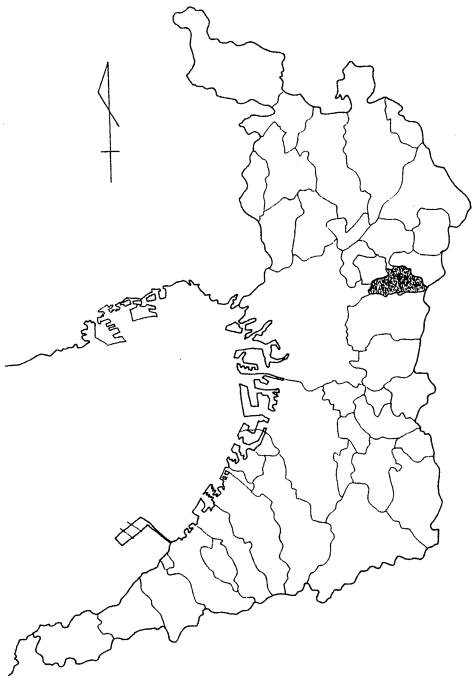
元粉遺跡は大阪府大東市中垣内３丁目一帯にかけて所在し、南北約140m、東西約160mの範囲を持つと推定されている遺跡である。これまでは遺物散布地として周知されていたもので、本格的な調査もなく、遺跡の内容は全く明らかにされていなかった。

地理的には鍋田川右岸一帯に位置しており、鍋田川によって形成された扇状地とその北側に張り出している低位段丘上に立地している。

以下、周辺の遺跡を中心に歴史的推移を概観する。

〈旧石器時代〉

中垣内遺跡からナイフ形石器が出土している。[1] しかし、昭和34年における調査のため、出土状況など詳細は明らかでないが、この時代の遺物としては現在のところ市内唯一のものである。



第２図　大東市位置図

〈縄文時代〉

集落を示すような具体的な遺構は検出されていないため、様相については明らかではない。唯一、中垣内遺跡で中期後半の土坑状の遺構と推測されるものが確認されているのみである。[2] 遺物では、北条遺跡、宮谷古墳群で草創期の有舌尖頭器などが出土・採集されている他、[3] 土器では包含層等からの出土ではあるが主に扇状地に立地する遺跡から早期末～前期初頭の可能性のある土器片から晩期に至るまでほぼ全時期を通して見受けられる。

そして、磨耗を受けず比較的残りの良好な遺物も多いことから丘陵、扇状地などに集落跡の存在した可能性は十分あると考えられる。

〈弥生時代〉

この時代から市域においても遺構を伴う遺跡が多数確認されるようになる。前～中期の集落跡が確認された中垣内遺跡、[4] 北条西遺跡、[5] 後期の竪穴住居を検出した北条遺跡[6]などがある。また、中垣内遺跡の東に位置する鍋田川遺跡では後期のまとまった遺物が出土しており、[7] 当時の集落の動向を考えるうえでも重要な遺跡であることが明らかになりつつある。

〈古墳時代〉

当時、河内湖東岸に位置していた市域においても多数の集落が営まれるようになり、前期では鍋田川遺跡、[8] 中～後期にかけては北新町遺跡、[9] メノコ遺跡[10]などがある。特に特徴的な様相としては初期須恵器、韓式系土器、鳥足文を施した陶質土器の出土など渡来系的影響の強い遺物が目立ち、先に述べた河内湖東岸という地勢的環境からも頷けるものである。

古墳に関しても多くの古墳、古墳群が周知されているが、残念ながら詳細の解らないものが多い。その中において城ヶ谷遺跡、[11] 北条遺跡、[12] 宮谷古墳群、[13] 堂山古墳群[14]で古墳の調査が行われている。特に堂山古墳群では三角板皮綴短甲、衝角付冑、鉄刀、鉄鏃など多量の鉄製武器、武具類が出土している

ことから当時の有力な首長墓と考えられており、当時の社会を考えるうえで貴重な成果をあげている。

〈古　代〉

奈良時代では北新町遺跡[15]、寺川遺跡[16]で集落が確認、推測されている。特に北新町遺跡では人面墨書土器が出土し、また寺川遺跡では「白麻呂」と墨書された土器が出土するなど、官衙的集落の存在が推定されている。

平安時代では寺川遺跡で集落跡が確認されている[17]。特に、直径１ｍ程の木を刳り貫いた井筒などは注目され、また河川跡からはウマの骨が一体復元出来るほどの出土があり、通常の集落とはかなり違う様相を示している。

〈中　世〉

北新町遺跡で12～13世紀を中心とした集落跡[18]、御領遺跡で13～14世紀の集落跡が確認されており[19]、市域における中世の様相も明らかにされてきている。また、城跡に関しても、戦国武将、三好長慶の飯盛城、その支城とされる野崎城、キリシタンで有名な三箇サンチョの三箇城などが知られている。ただ、考古学的には飯盛城において発掘調査がわずかに実施されている[20]のみで残念ながら詳細は明らかにされていない。

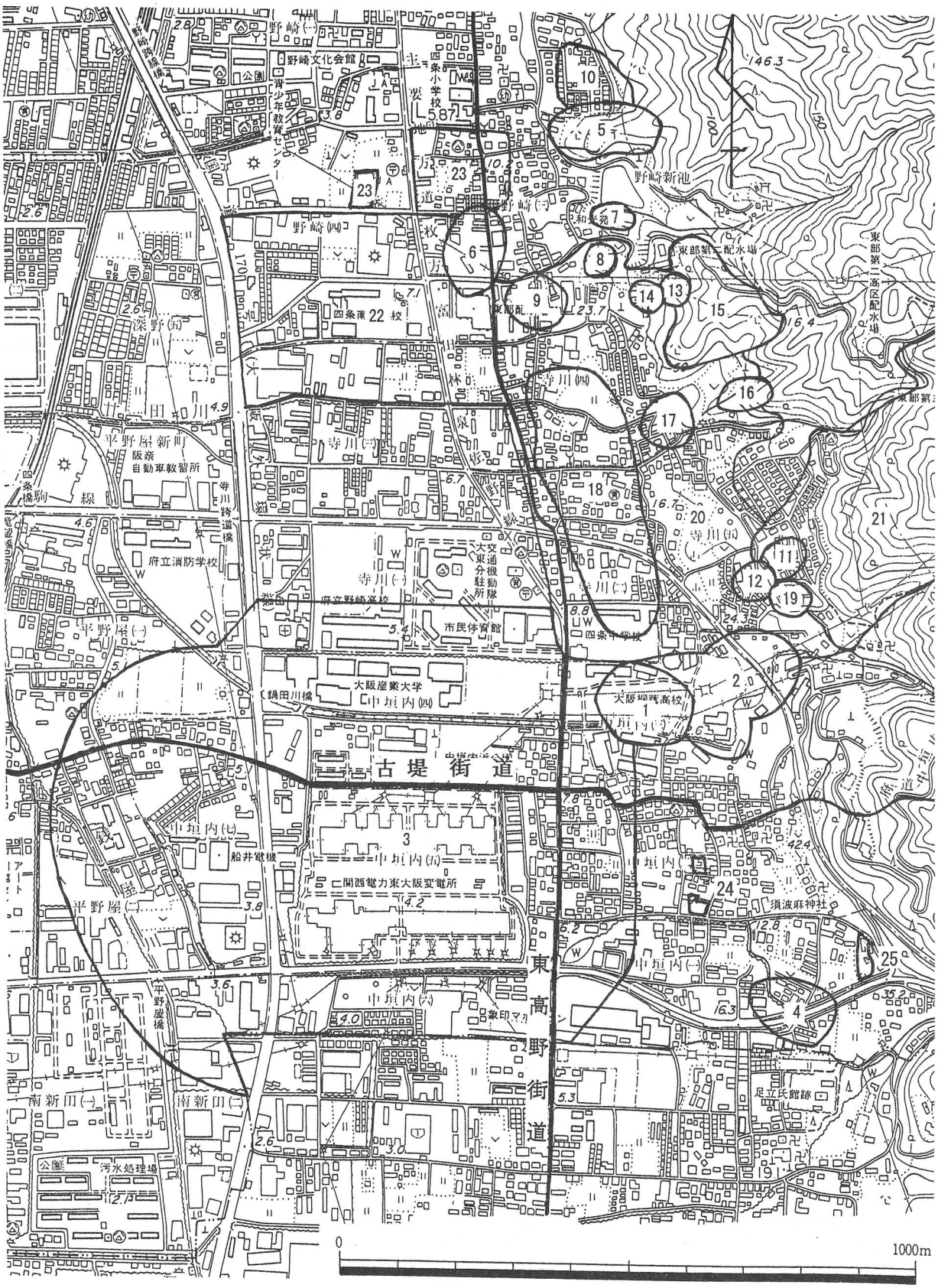
〈近　世〉

大阪城の築城、また江戸幕府による再築の際、石垣用石材の供給地であった石切場跡[21]や、宝永元年(1704)の大和川付け替えに伴い新田開発が盛んになるが、その管理施設であった平野屋新田会所などがある[22]。

また西諸福遺跡では近年の発掘調査において深野池、新開池とは別の池と推定される遺構が検出されており、備前擂鉢、壺、美濃窯系天目茶碗、胎土目唐津窯系皿、堺擂鉢、石臼などの陶磁器類がまとまって出土している[23]。

(註)

（1）大阪府史編集専門委員会　1991年　『大阪府史』別巻　大阪府
（2）大東市教育委員会　1997年　『中垣内遺跡発掘調査報告書』大東市埋蔵文化財調査報告第11集
（3）大東市教育委員会　1987年　『寺川・北条遺跡発掘調査報告書』大東市埋蔵文化財調査報告第1集
　宮谷古墳群内の有舌尖頭器については、土地所有者の中松登茂一氏の採集による。
（4）大東市教育委員会　2004年　『中垣内遺跡』大東市埋蔵文化財調査報告第20集
（5）中逵健一　1995年　「大東市・北条西遺跡（93・1次調査）」　『まんだ』第五十六号
（6）大東市教育委員会　1987年　『寺川・北条遺跡発掘調査報告書』大東市埋蔵文化財調査報告第1集
（7）1998年調査。（未報告）
（8）大東市教育委員会　1973年　『大東市史』
（9）大東市北新町遺跡調査会　1991年　『北新町遺跡第２次発掘調査概要報告書』他
（10）大東市教育委員会　1998年　『メノコ遺跡発掘調査報告書』大東市埋蔵文化財調査報告第14集
（11）大東市教育委員会　1990年　『城ヶ谷遺跡発掘調査報告書』大東市埋蔵文化財調査報告第6集
（12）大東市教育委員会　1987年　『寺川・北条遺跡発掘調査報告書』大東市埋蔵文化財調査報告第1集
（13）黒田淳　1988年　「大東市“宮谷古墳群の調査”」　『まんだ』第三十五号
（14）大阪府教育委員会　1993・1994年　『堂山古墳群』大阪府文化財調査報告書第四五輯
（15）大東市北新町遺跡調査会　1986年　『北新町遺跡第１次発掘調査概要報告書』他
（16）大東市教育委員会　1997年　『寺川遺跡発掘調査報告書』大東市埋蔵文化財調査報告第13集
（17）註（16）に同じ。
（18）大東市北新町遺跡調査会　1997年　『北新町遺跡第３次発掘調査概要報告書』他
（19）大東市教育委員会　1999年　『御領遺跡』大東市埋蔵文化財調査報告第15集
（20）1989年調査。（未報告）
（21）大東市教育委員会　1989年　『大東市埋蔵文化財発掘調査概報』大東市埋蔵文化財調査報告第3集
（22）大東市教育委員会　2002年　『旧平野屋新田会所屋敷と建物』大東市文化財調査報告書
（23）大東市教育委員会　2000年　『西諸福遺跡発掘調査報告書』大東市埋蔵文化財調査報告第17集



1 元粉遺跡　2 鍋田川遺跡　3 中垣内遺跡　4 若宮遺跡　5 福蓮寺遺跡　6 メノコ遺跡
7 峯垣内遺跡　8 市水道寺川配水場古墳　9 瓦堂遺跡　10 福蓮寺古墳　11 城の越上の段古墳
12 城の越古墳　13 堂山上遺跡　14 堂山下古墳　15 堂山古墳群　16 六地蔵古墳
17 十林寺古墳　18 寺川古墳群　19 大谷神社古墳　20 寺川遺跡　21 大谷古墳群
22 寺川浜遺跡　23 野崎条里遺跡　24 中垣内東遺跡　25 若宮東遺跡

第３図　周辺遺跡分布図（Ｓ＝1/10000）

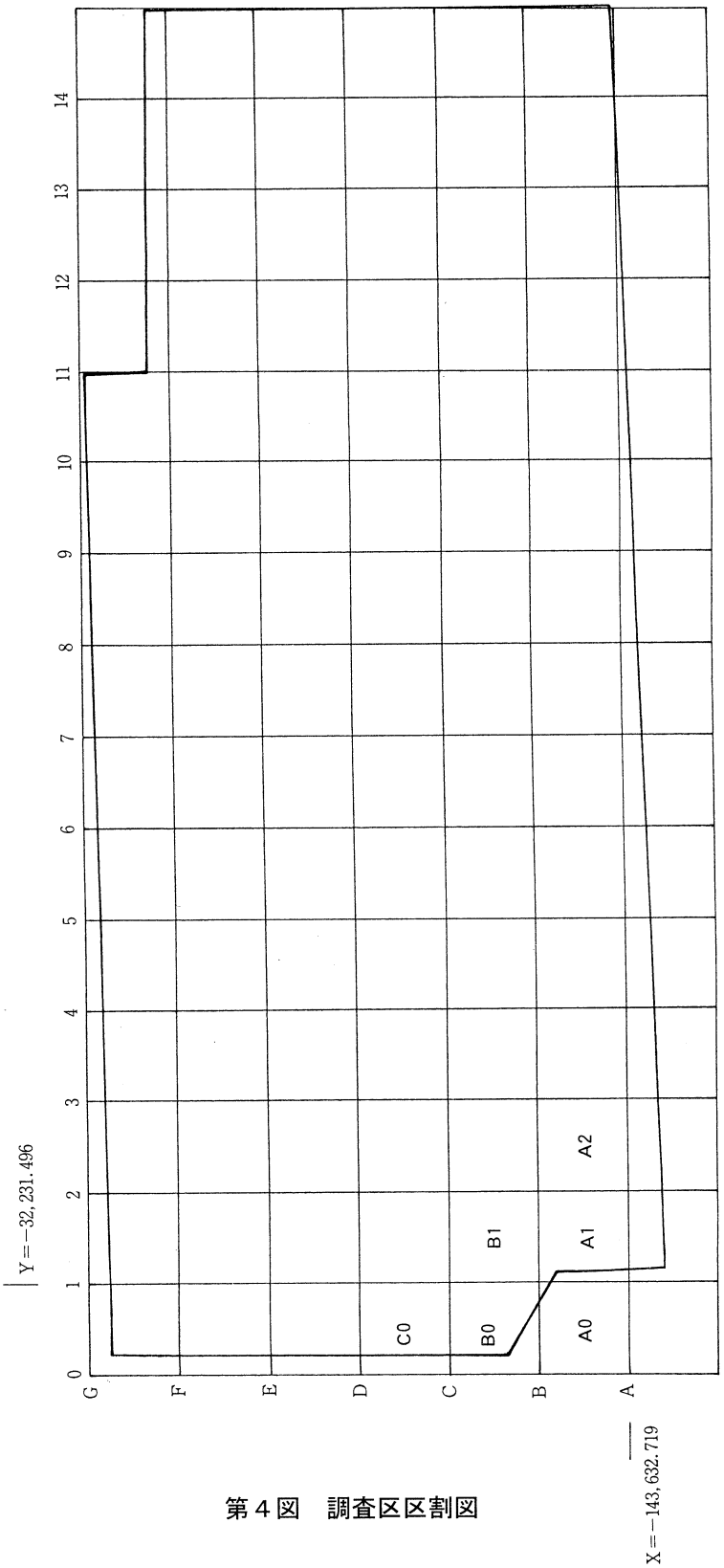
第３章　調査の方法

掘削に関しては、盛土、旧耕作土、床土までを機械掘削の対象とし、以下、包含層については層位ごとに人力による掘削を行った。そして、それぞれの層位面において遺構の確認を行いながら、地山面に至るまで順次繰り返した。

記録作業については、まず区割り設定を行ったが、国土座標第Ⅵ系による座標軸を基準に調査計画地を覆い、それを５ｍ毎に等分して５ｍ四方に区画した。区画の呼称については南北ラインに西端を起点として数字を順次付し、また東西ラインには北端を起点としてアルファベットを順次付することにより、各交点を記号化して南西隅の交点を用いている（第４図）。包含層の遺物の取り上げ他、各種記録作業はこれをもとにし、報告書の記述においても同様である。また、水準については T.P.（東京湾平均海面値）を使用している。

遺構番号については、遺構面ごとに付与し、遺構面を示す数字を遺構番号の頭に冠している。

写真撮影については、６×７の中型カメラによるモノクロ撮影、35mm小型カメラではモノクロ、カラーそれぞれ撮影し、またスライドの作成も行った。



第４図　調査区区割図

第４章　調査成果

第１節　基本層序

今回の調査対象範囲のうち、東側の約3分の2にあたる部分が既に旧校舎建設時に削平を受けており、西側の約3分の１程度の範囲において遺構等が良好に残されていた状態であった。従って、層序についても調査区西側において観察されたものである。

調査地は低位段丘から扇状地に移行する地域に位置することから、旧地形は基本的には南西及び南方向に傾斜する状況を呈していた。それに伴い確認された包含層についても、その地形的相関により南西及び南方向に向かって厚く堆積するものであった。しかし、調査区南西部分に限っては耕地化に伴う平地化により水平堆積を成す状況であった。

以下、基本的な層序について述べる。

第Ⅰ層　盛土。大阪産業大学校舎建設に伴う造成時のものである。階段状に耕地化された場所での造成であったため、北側では約0.4mと薄く、南西側の厚い部分では約2.0mを測る。

第Ⅱ層　旧耕作土。階段状に耕地化された南西側の下段部分にのみ見受けられ、北東側の上段部分では既に削平を受けたようである。水平堆積を成し、層厚は0.1～0.2mを測る。

第Ⅲ層　床土。第Ⅱ層に伴うもので、層厚は0.05mを測る。

第Ⅳ層　暗灰緑色砂質土。第Ⅱ層と同様に南西側の下段部分にのみ見受けられ、水平堆積を成す。層厚は0.2mを測る。遺物は土師器、須恵器、磁器が出土している。

第Ⅴ層　灰色土。第Ⅱ～Ⅳ層同様、南西側の下段部分を中心に見受けられるが、北東側の上段部分においても一部見受けられた。水平堆積を成し、層厚は0.1～0.2mを測る。第１遺構面のベース層になる。遺物は土師器、須恵器が出土している。

第Ⅵ層　褐色混灰色土。階段状に耕地化された南西側の下段部分では削平を受けたものと思われ、それ以外の区域において見受けられた。南西方向に向かって厚く堆積しており、層厚は0.1～0.2mを測る。鉄分を含む。遺物は土師器、須恵器、青磁、石鏃などが出土している。

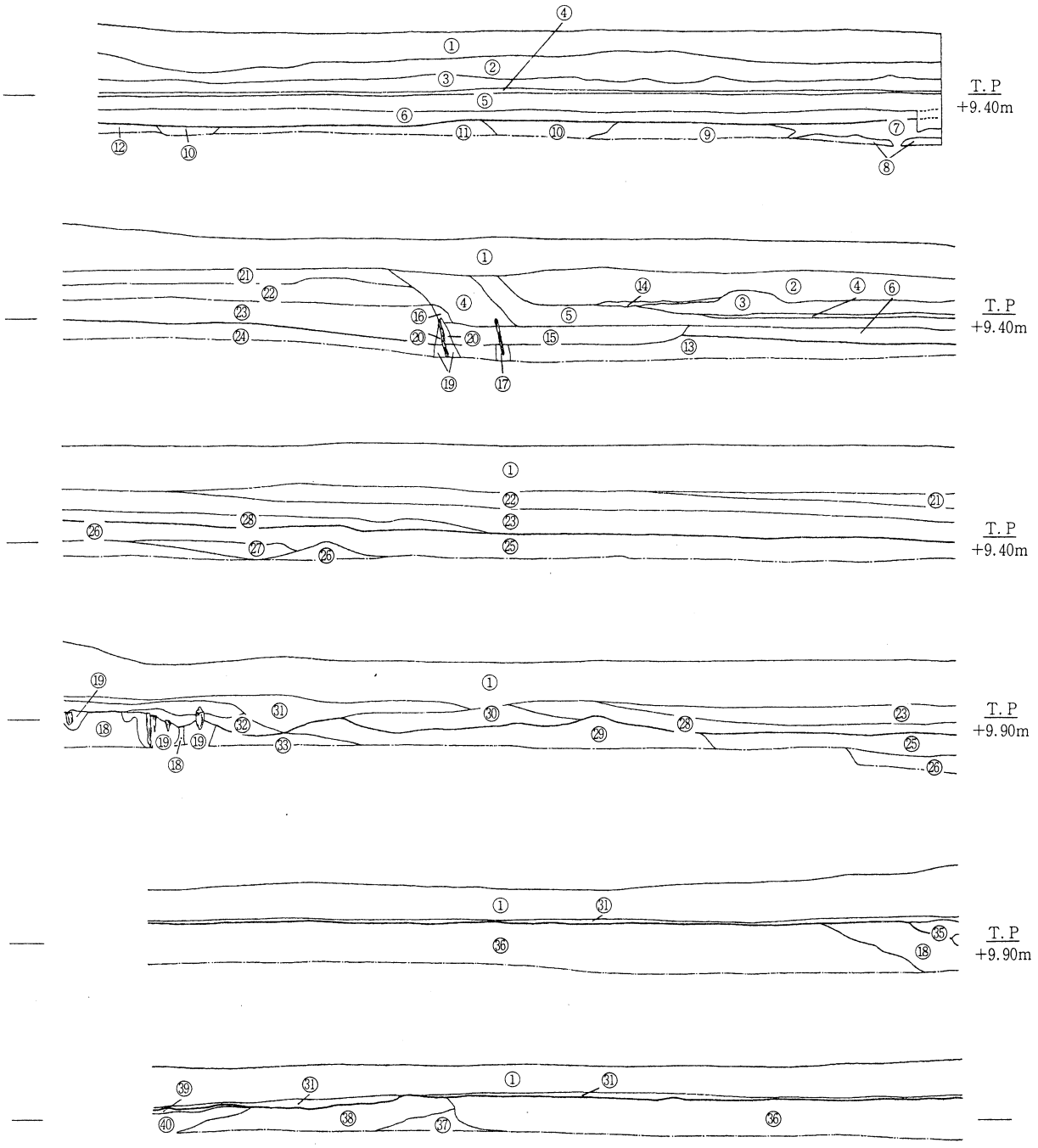
第Ⅶ層　灰黄色土。第Ⅵ層と同様で、南西側の下段部分以外において見受けられた。南西方向に向かって厚く堆積しており、層厚は0.2mを測る。マンガンを含む。遺物は比較的多く包含し、土師器、須恵器、青磁、白磁、瓦、製塩土器、銭貨などが出土している。

第Ⅷ層　黒灰色土。第Ⅵ、Ⅶ層と同様で、南西側の下段部分以外において見受けられた。南西方向に向かって厚く堆積しており、層厚は0.2～0.4mを測る。包含層の中では一番多量の土器を含んでおり、縄文土器、弥生土器、土師器、須恵器、瓦、製塩土器、土製品、石製品、サヌカイト片などが出土している。

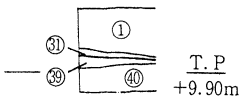
第Ⅸ層　暗灰緑色粘質土。南西側の下段部分において見受けられたいわゆる地山層である。層厚は確認し得なかった。第２遺構面のベース層になる。

第Ⅹ層　礫混暗灰黄色土。調査区南部において南西側の下段部分以外において見受けられたいわゆる地山層である。層厚は0.2～0.3mを測る。第２遺構面のベース層になる。

第Ⅺ層　黄灰～黄褐色土。調査区北部において見受けられたいわゆる地山層である。層厚は0.1～0.3mを測る。第２遺構面のベース層になる。

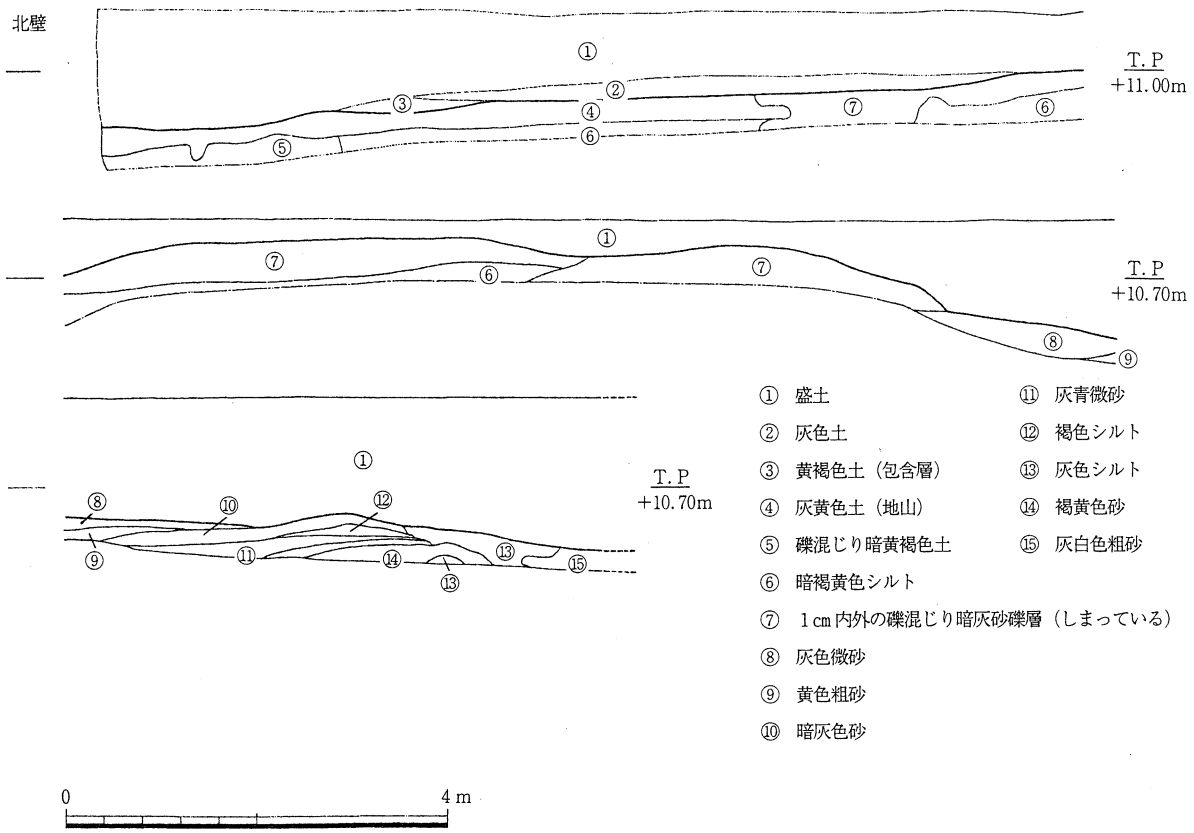


① 盛土−1
② 盛土−2
③ 旧耕作土
④ 床土
⑤ 暗灰緑色砂質土
⑥ 灰色土
⑦ 灰緑色シルト
⑧ 灰黄色粗砂
⑨ 黄褐色粗砂
⑩ 暗灰色砂
⑪ 暗灰青色粘質土
⑫ 緑灰色粘質シルト
⑬ 暗灰緑色粘質土
⑭ 暗灰色粘質シルト（耕土の一部）
⑮ 暗灰色砂混じり粘質土（水路）
⑯ 暗茶褐色粘土
⑰ 灰緑色砂質土
⑱ 灰黄色シルト
⑲ 緑灰色シルト
⑳ 暗灰色土
㉑ 褐色混じり灰色土
㉒ 灰黄色土（鉄分を含む）
㉓ 黒灰色土（マンガンを含む）
㉔ 灰黄色シルト砂質土
㉕ 暗灰黄色土（礫混じり）
㉖ 灰緑色粘質シルト
㉗ 灰黄色粘質シルト
㉘ 黒灰色土（5cm内外の礫が混じる）
㉙ 暗灰褐色土
㉚ 暗茶褐色土（礫混じり）
㉛ 暗灰色土（10cm内外の石が多い）
㉜ 褐黄色砂
㉝ 灰黄色シルト
㉞ 黒灰色粗砂
㉟ 黒色粗砂
㊱ 灰黄色粗砂・シルト砂の互層
㊲ 灰色砂
㊳ 緑灰色土
㊴ 灰緑色シルト
㊵ 黒色粗土

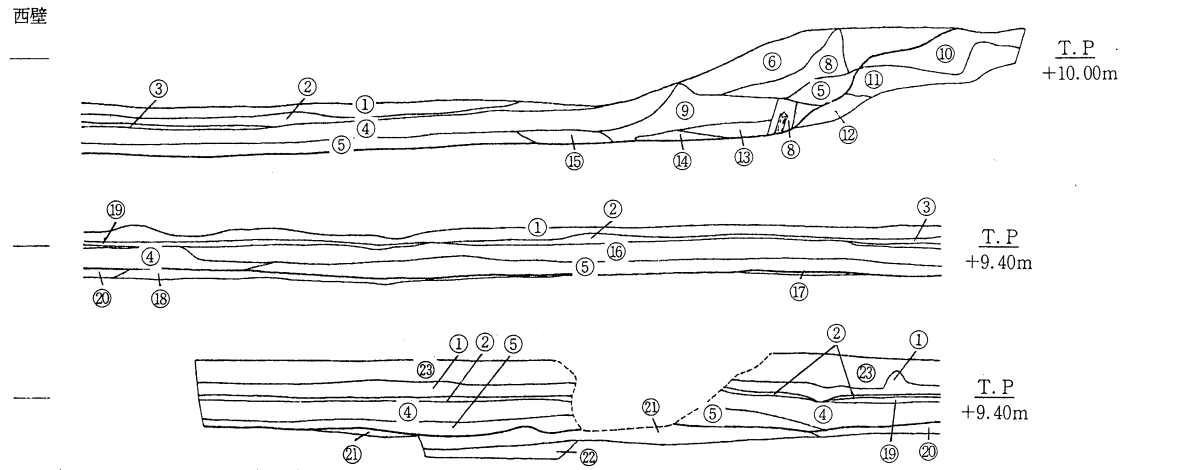


0　4m

第５図　調査区南壁断面図（Ｓ＝1/80）

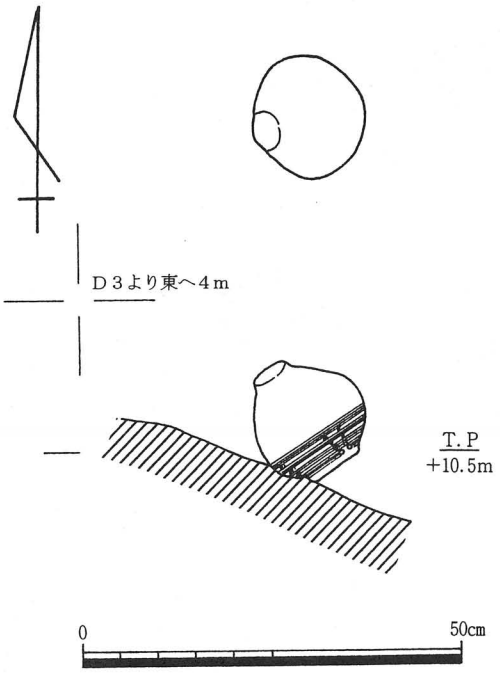


① 盛土
② 灰色土
③ 黄褐色土（包含層）
④ 灰黄色土（地山）
⑤ 礫混じり暗黄褐色土
⑥ 暗褐黄色シルト
⑦ 1㎝内外の礫混じり暗灰砂礫層（しまっている）
⑧ 灰色微砂
⑨ 黄色粗砂
⑩ 暗灰色砂
⑪ 灰青微砂
⑫ 褐色シルト
⑬ 灰色シルト
⑭ 褐黄色砂
⑮ 灰白色粗砂

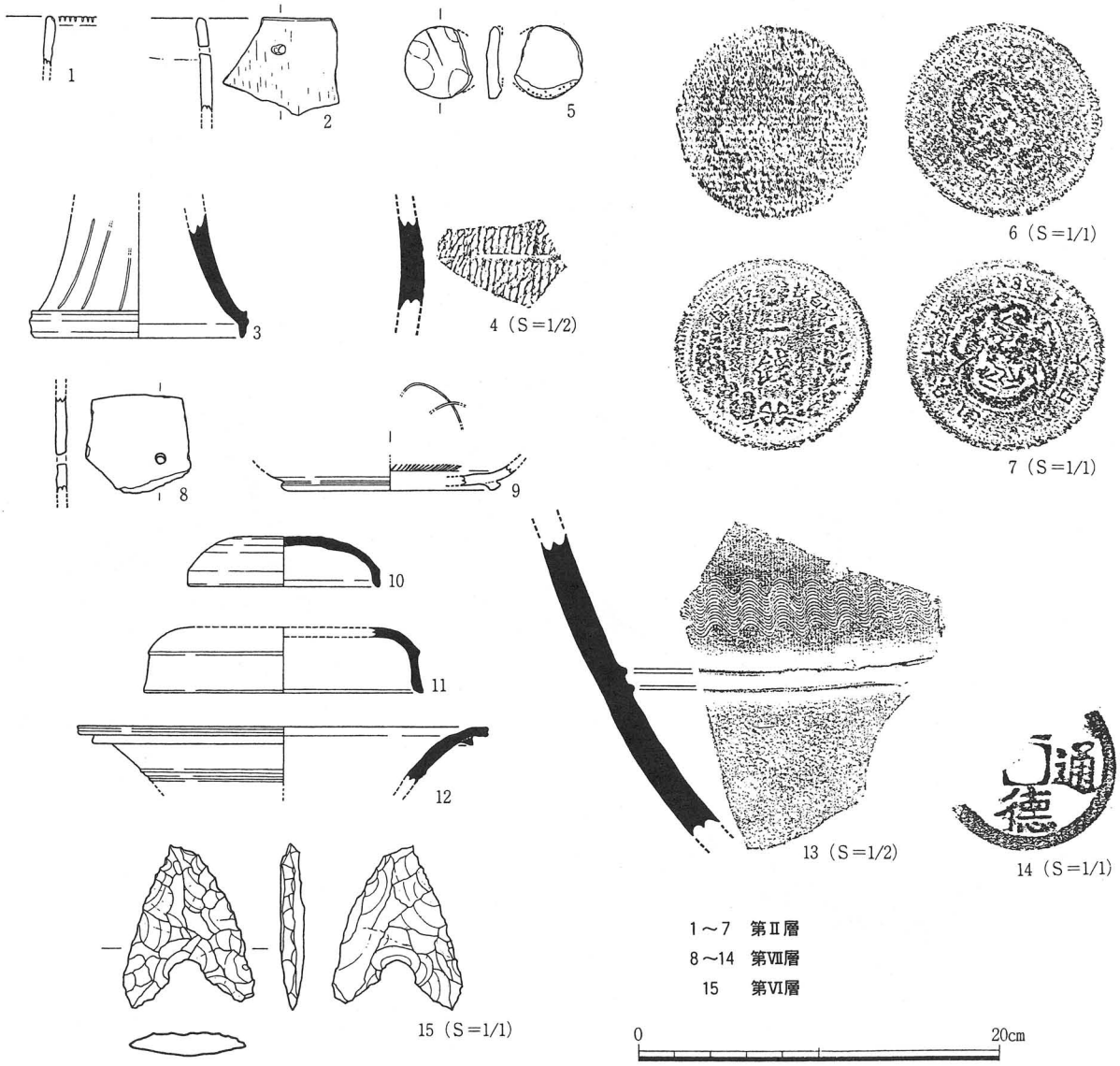


① 旧耕作土
② 床土
③ 床土
④ 暗灰緑色砂質土
⑤ 灰色土
⑥ 暗灰色土
⑦ 褐色土
⑧ 暗灰緑色土
⑨ 灰黄色土
⑩ 黄褐色土
⑪ 礫混じり暗褐色土
⑫ 灰緑色シルトと暗灰色砂
⑬ 暗灰黄色砂
⑭ 白黄色シルト
⑮ 淡灰緑色シルト
⑯ 暗灰緑色砂質土（わずかに酸化）
⑰ 灰緑色シルト
⑱ 淡灰黄色シルト
⑲ 床土（鉄分沈着）
⑳ 暗灰色砂
㉑ 黄色混じり灰緑色シルト
㉒ 灰色砂
㉓ 盛土

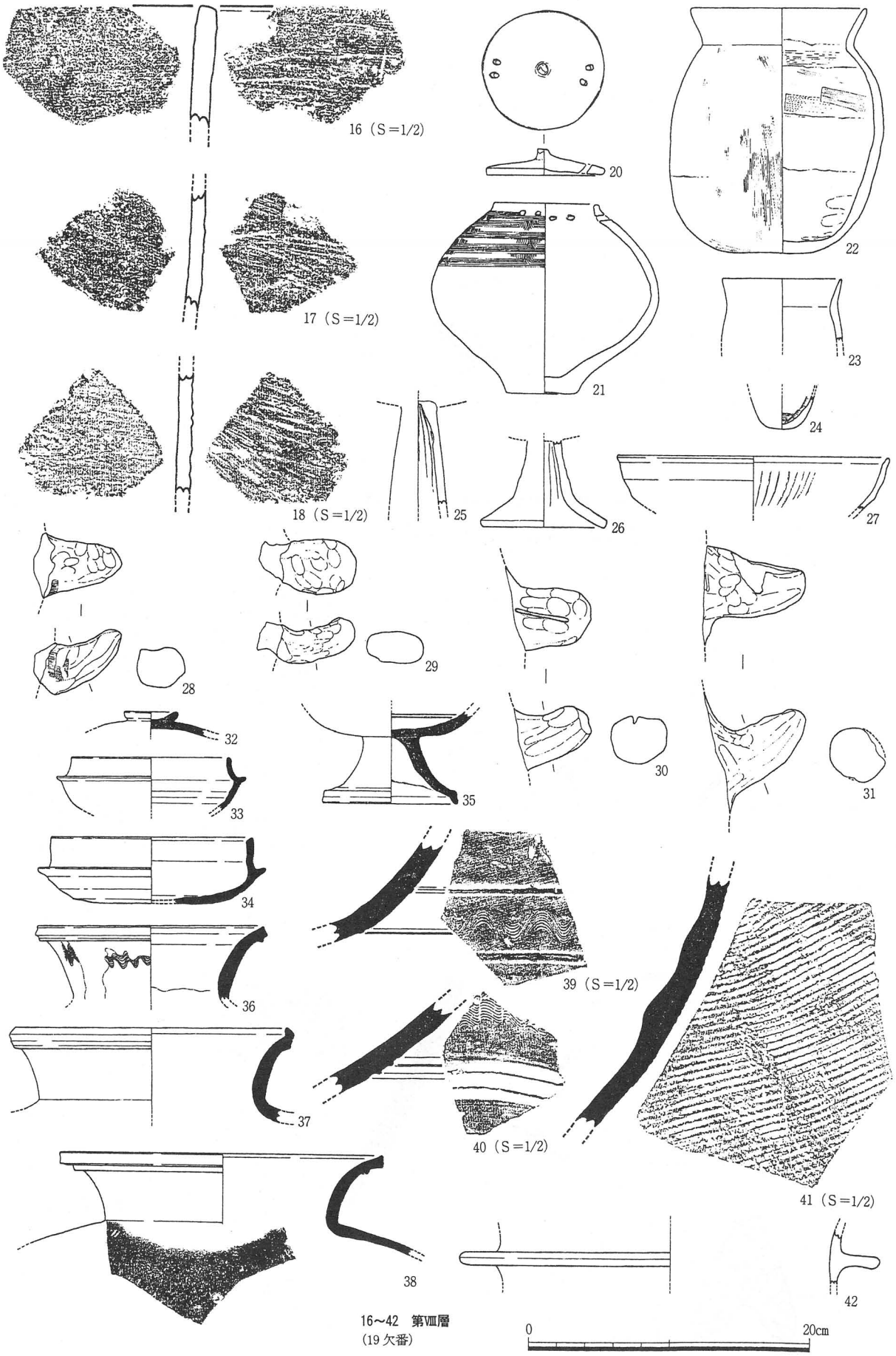
第６図　調査区北・西壁断面図　（S＝1/80）



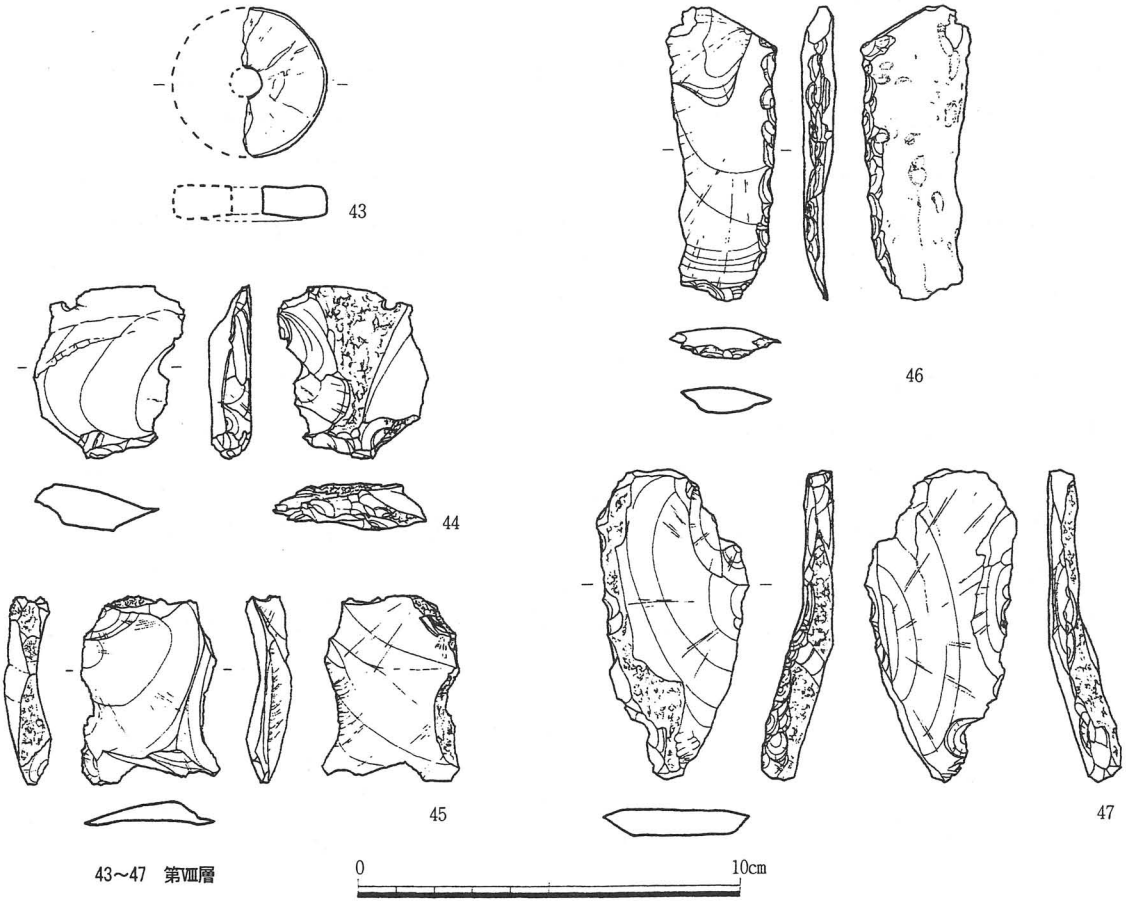
第７図　第Ⅷ層遺物出土状況図



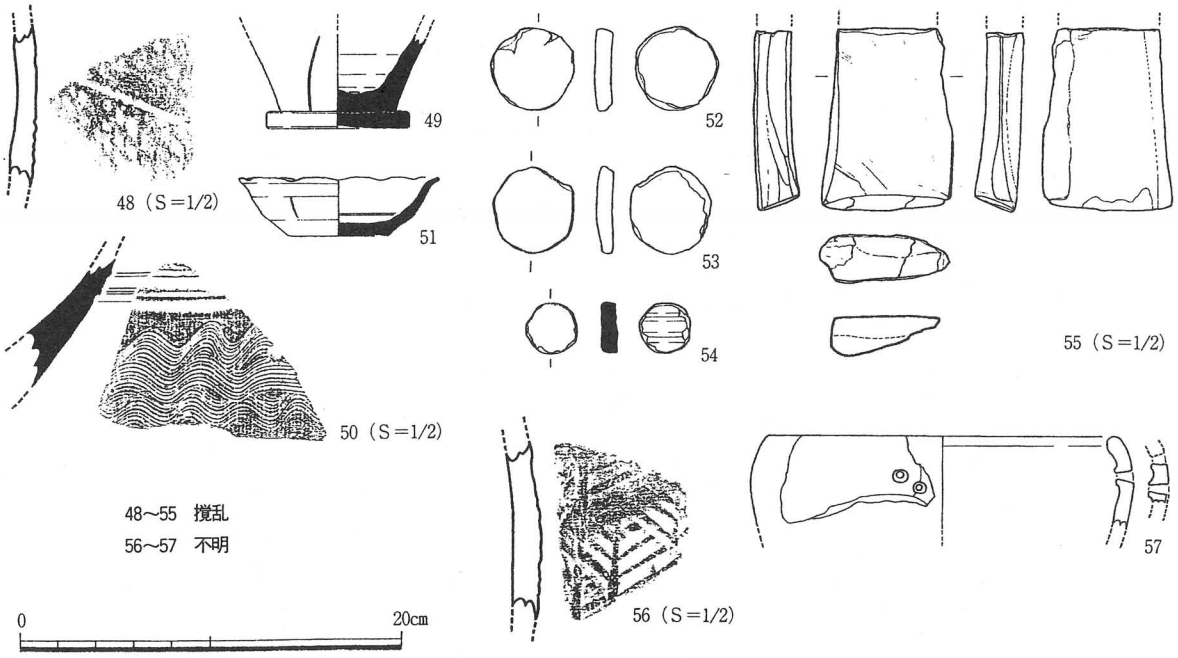
第８図　包含層等出土遺物(1)



第９図　包含層等出土遺物(2)



第10図　包含層出土遺物(3)



第11図　包含層等出土遺物(4)

第２節　第１遺構面

調査は基本層序の項でも述べたが、調査区の東側約３分の２が既設校舎のため遺構は全く残っておらず、西側の木造建築物が残っていた部分と地形的に低くなる部分において残存していたものであるが、基本層序第Ⅰ～Ⅲ層を機械掘削した結果、一段低くなった調査区南西部において、第Ⅴ層がベース面となり、水路、鋤溝と考えられる溝を検出した。全体的には階段状に造られた耕作地の様相を呈していたものと思われる。

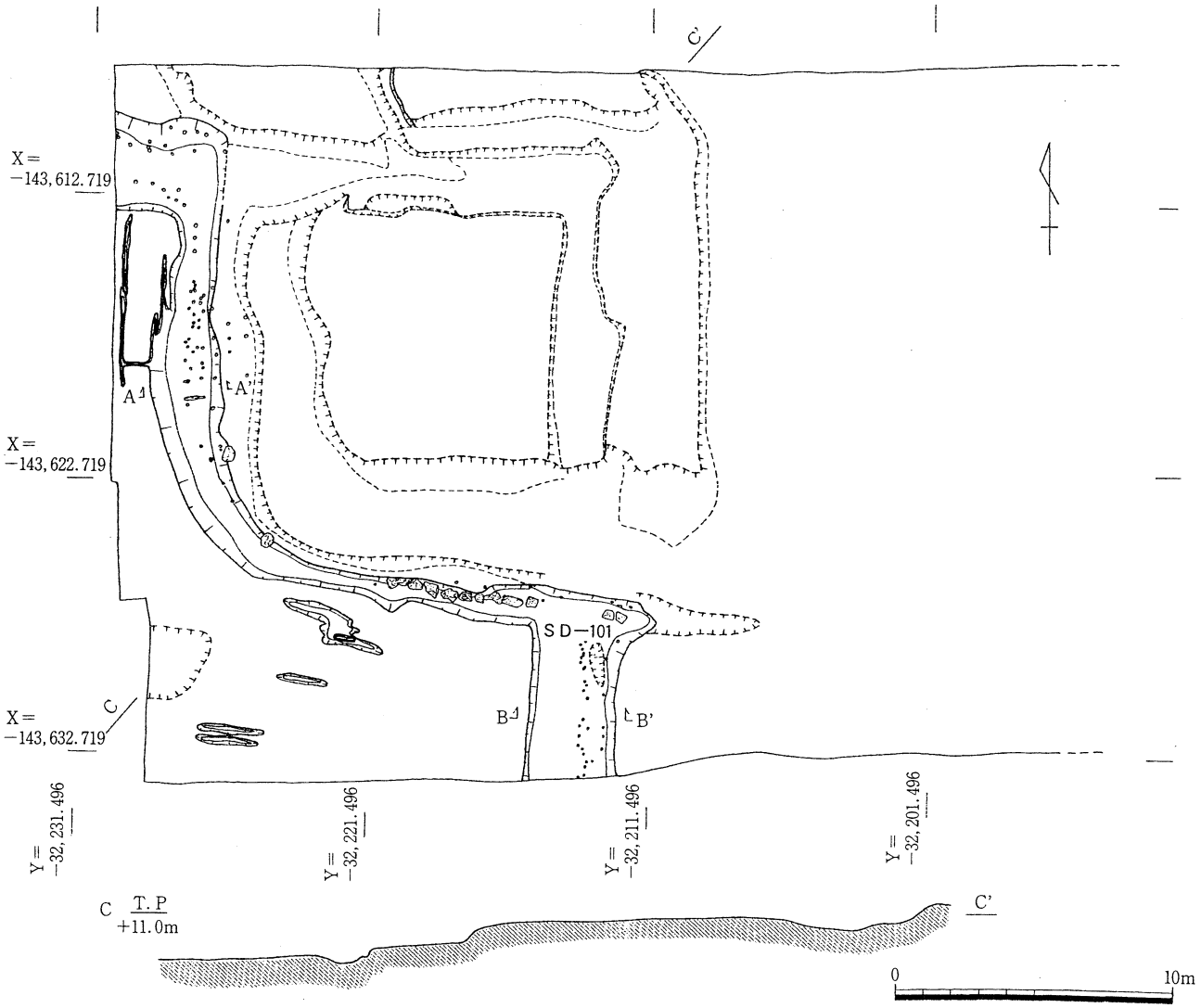
１．溝

ＳＤ－１０１（第12図）

階段状に造られた耕作地の段の境界部分に沿って検出したもので水路と思われる。幅約0.7～3.0m、深さ約0.35mを測る。埋土は暗灰色砂質土を主体となし、埋土状況などから数回の改修が見受けられる。また多数の杭列や部分的に石列が認められた。遺物は陶磁器、須恵器、土師器、瓦等が出土している。

その他の溝

鋤溝と考えられるもので幅約0.2～0.3m、深さ約0.2～0.3mを測る。遺物は陶器片が出土している。



第12図　第１遺構面全体図

第３節　第２遺構面

地山層であるⅨ・Ｘ・ＸＩ層をベースにして、溝、土坑、井戸、掘立柱建物などを検出した。北から南に向かって傾斜する状況を呈しており、標高は北側の高い所でT.P.+11.5m、南側の低い所でT.P.+9.1mである。

１．溝

ＳＤ－２０１（第13図）

Ｅ２～３区にかけて検出した。幅約0.4m、深さ約0.12mを測る。埋土は黄褐色土混黒灰色土である。遺物は土師器、須恵器、製塩土器などが出土している。

ＳＤ－２０２（第13図）

Ｅ３区で検出した。幅約0.4m、深さ約0.3mを測る。埋土は茶褐色砂質土、茶褐色土、暗黄褐色土である。遺物は土師器、須恵器などが出土している。

ＳＤ－２０３（第13図）

Ｄ４～５区にかけて検出した。幅約0.45m、深さ約0.09mを測る。埋土は灰色砂質土である。遺物は土師器、須恵器、瓦質土器の火鉢、染付磁器、サヌカイト剥片などが出土している。

ＳＤ－２０４（第13図）

Ｃ３～５、Ｄ４～５区にかけて検出した。弧状を呈しており、幅約0.6m、深さ約0.3mを測る。埋土は黒灰色砂質土、黒灰色土である。遺物は土師器、須恵器、製塩土器などが出土している。

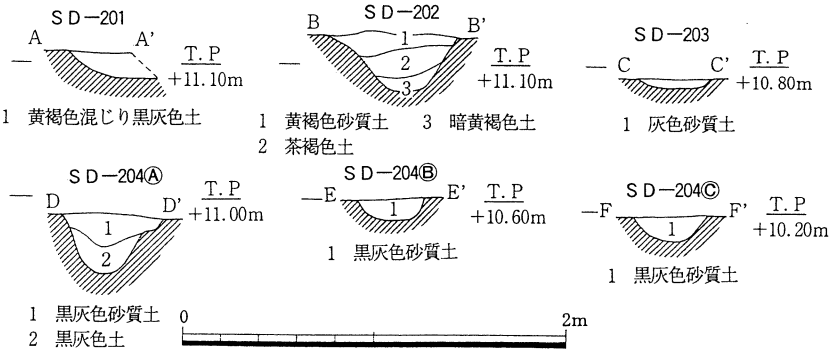
２．土　坑

ＳＫ－２０１

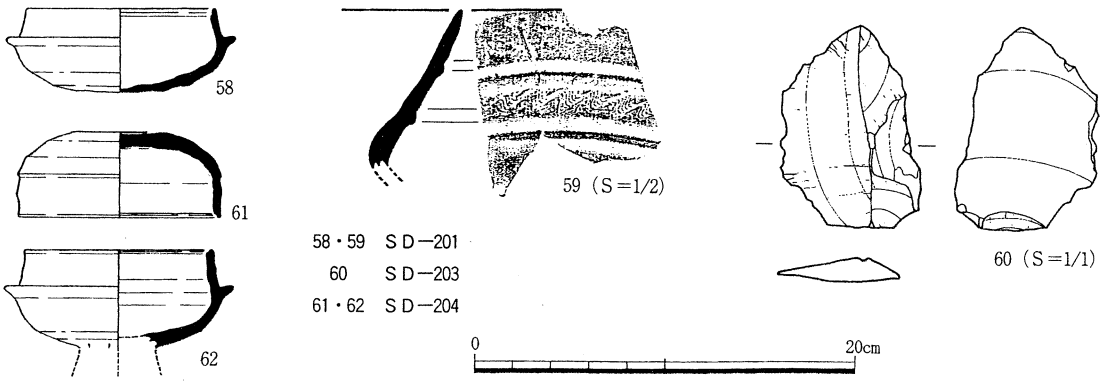
Ｅ２区で検出した。不定形を呈し、長径約0.7m、短径約0.45m、深さ約0.04mを測る。遺物は土師器、須恵器、染付磁器、砥石、サヌカイト剥片などが出土している。

ＳＫ－２０２

Ｅ２区で検出した。不定形を呈し、長径約0.7m、短径約0.3m、深さ約0.05mを測る。遺物は土師器、須恵器、陶器、瓦などが出土している。



第13図　第２遺構面　溝（ＳＤ）断面図



第14図　第２遺構面　溝（ＳＤ）出土遺物

ＳＫ－２０３（第17図）

Ｄ２区で検出した。不定形を呈し、長径約1.2m、短径約0.7m、深さ約0.25mを測る。埋土は灰色砂、灰色砂質土である。遺物は土師器、須恵器が出土している。

ＳＫ－２０４（第17図）

Ｄ２区で検出した。楕円形を呈し、長径約1.4m、短径約0.75m、深さ約0.27mを測る。埋土は黄灰色砂、灰黄色砂質土、暗黄褐色粗砂である。遺物は土師器、須恵器などが出土している。

ＳＫ－２０５（第17図）

Ｄ３区で検出した。不定形を呈し、残存長径約1.5m、短径約0.58m、深さ約0.25mを測る。埋土は黒灰色砂質土、黒灰色土である。遺物は出土していない。

ＳＫ－２０６（第17図）

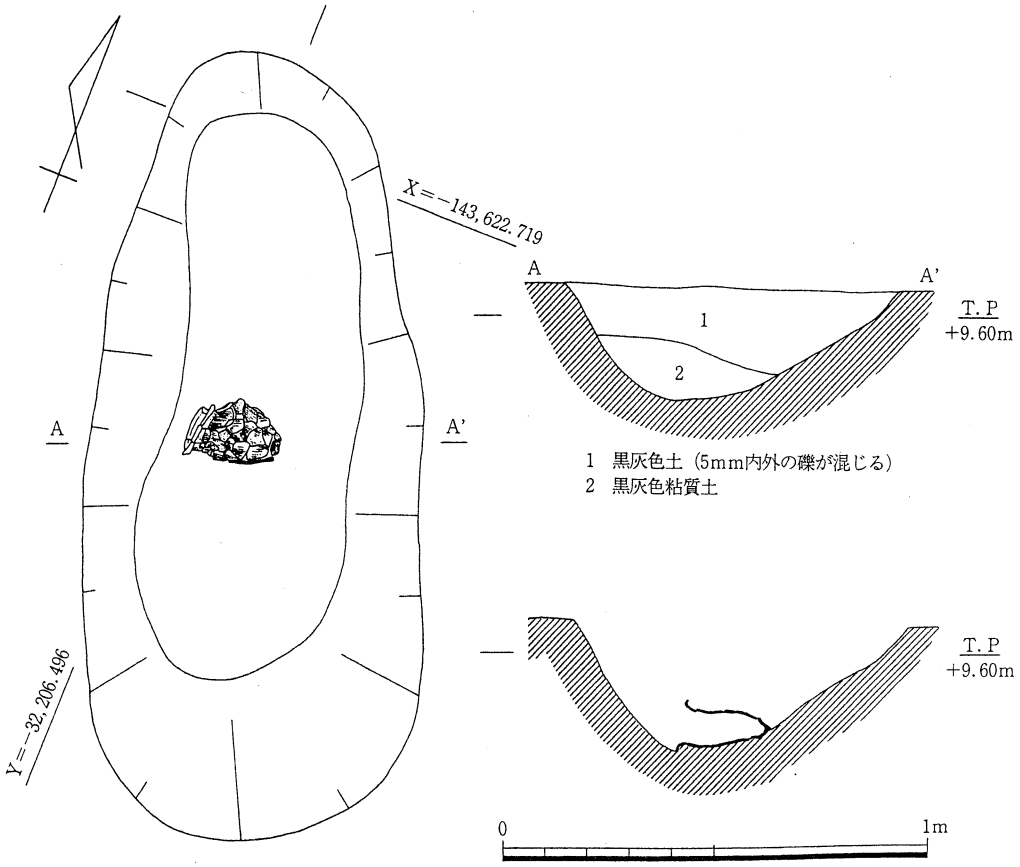
Ｄ４区で検出した。不定形を呈し、長径約1.2m、短径約0.7m、深さ約0.25mを測る。埋土は黒灰色土、黄灰色土、暗黄灰色土である。遺物は土師器、須恵器などが出土している。

ＳＫ－２０７（第17図）

Ｃ５区で検出した。不定形を呈し、長径約1.85m、短径約0.95m、深さ約0.15mを測る。埋土は茶褐色土、茶褐色粘質土である。遺物は出土していない。

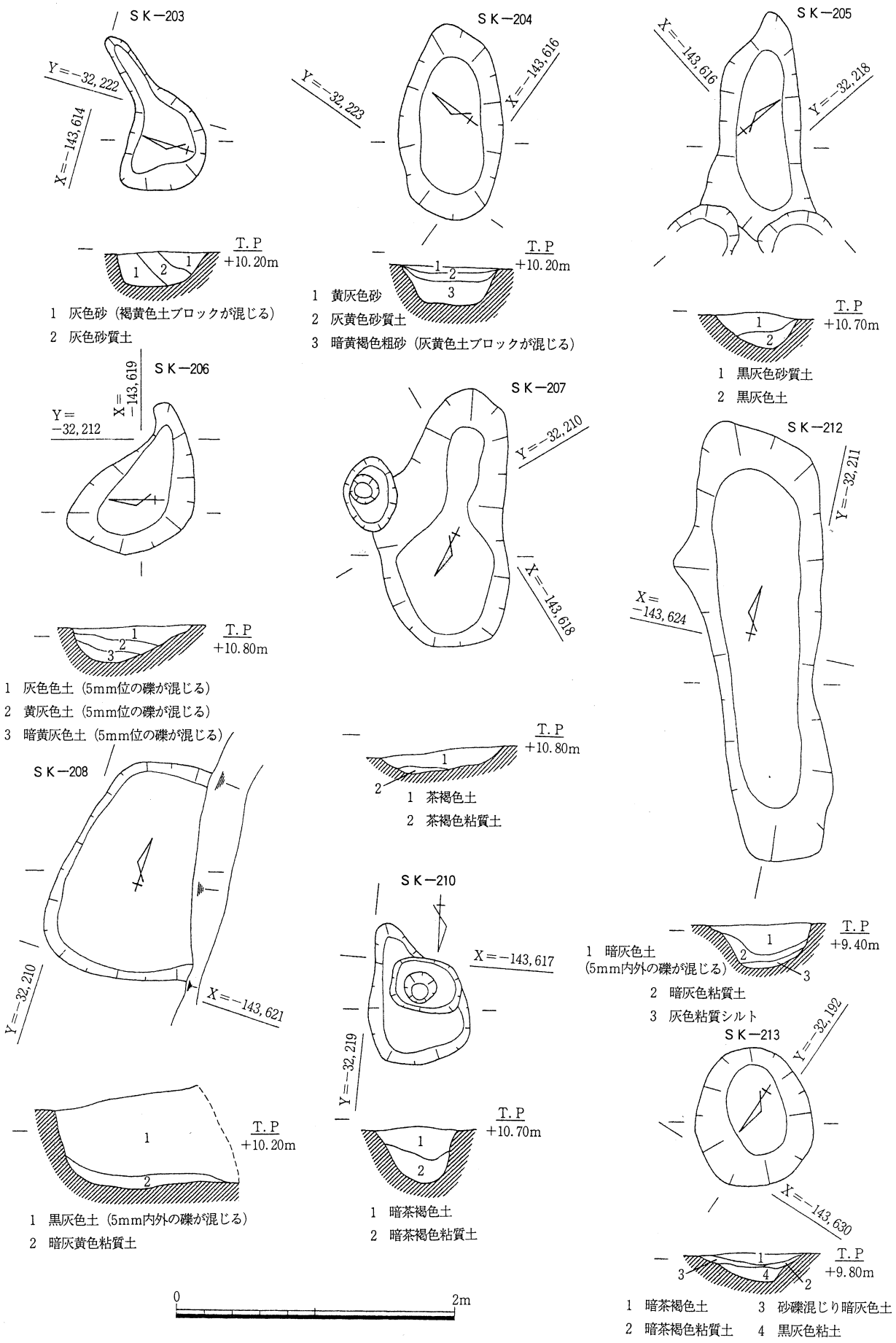
ＳＫ－２０８（第17図）

Ｃ５区で検出した。撹乱に切られているがほぼ楕円形を呈するものと思われ、長径約1.65m、短径約1.0m、深さ約0.7mを測る。埋土は黒灰色土、暗灰黄色砂質土である。遺物は土師器が出土している。

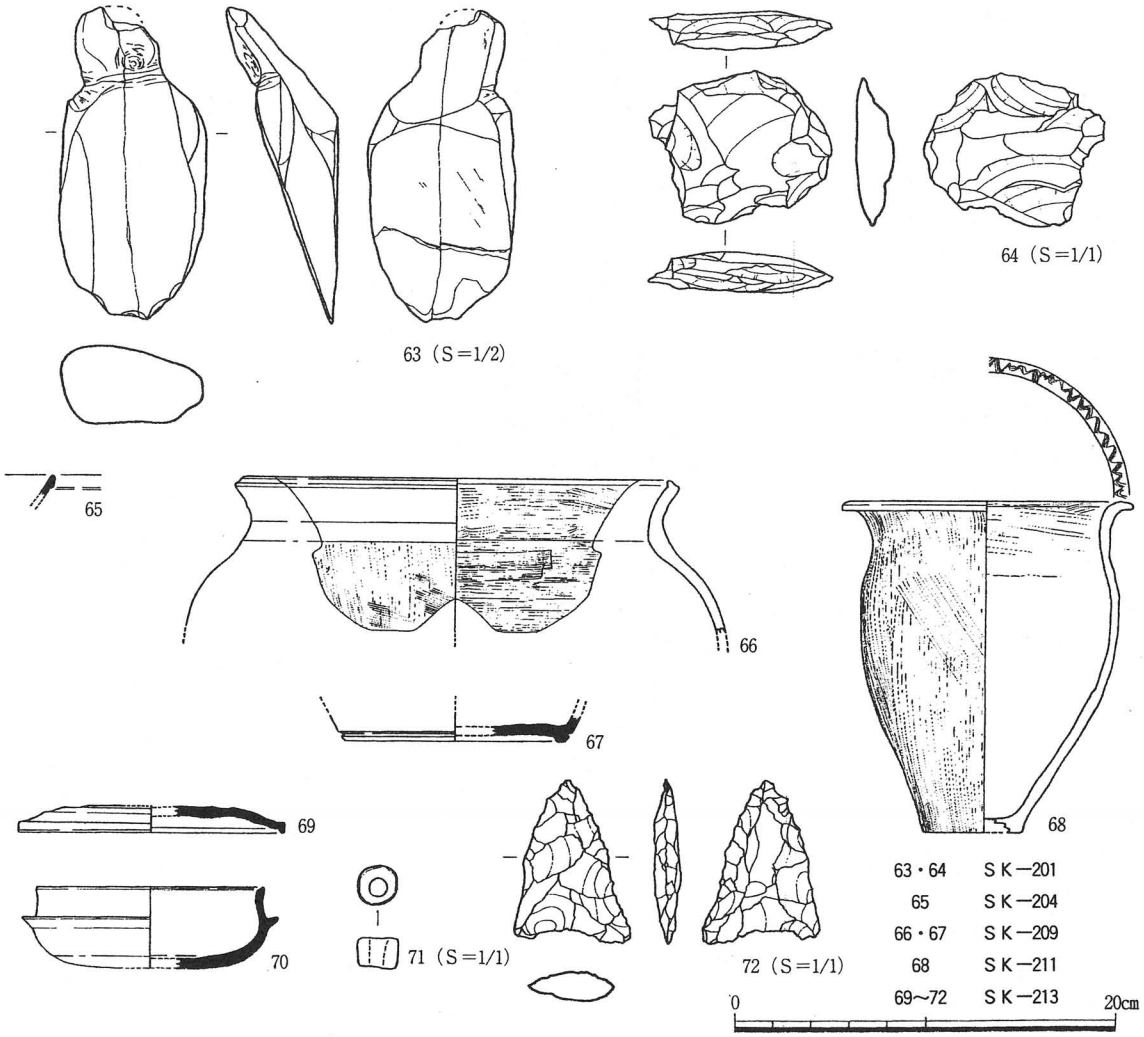


第15図　ＳＫ-２１１　平・断面・遺物出土状況図

第16図　第２遺構面全体図



第17図　第２遺構面　土坑（ＳＫ）平・断面図



第18図　第２遺構面　土坑（ＳＫ）出土遺物

ＳＫ－２０９

Ｅ３区で検出した。不定形を呈し、長径約1.0m、短径約0.8m、深さ約0.35mを測る。遺物は土師器、須恵器などが出土している。

ＳＫ－２１０（第17図）

Ｃ３～Ｄ３区にかけて検出した。不定形を呈し、長径約1.0m、短径約0.7m、深さ約0.4mを測る。埋土は暗茶褐色土、暗茶褐色粘質土である。遺物は出土していない。

ＳＫ－２１１（第15図）

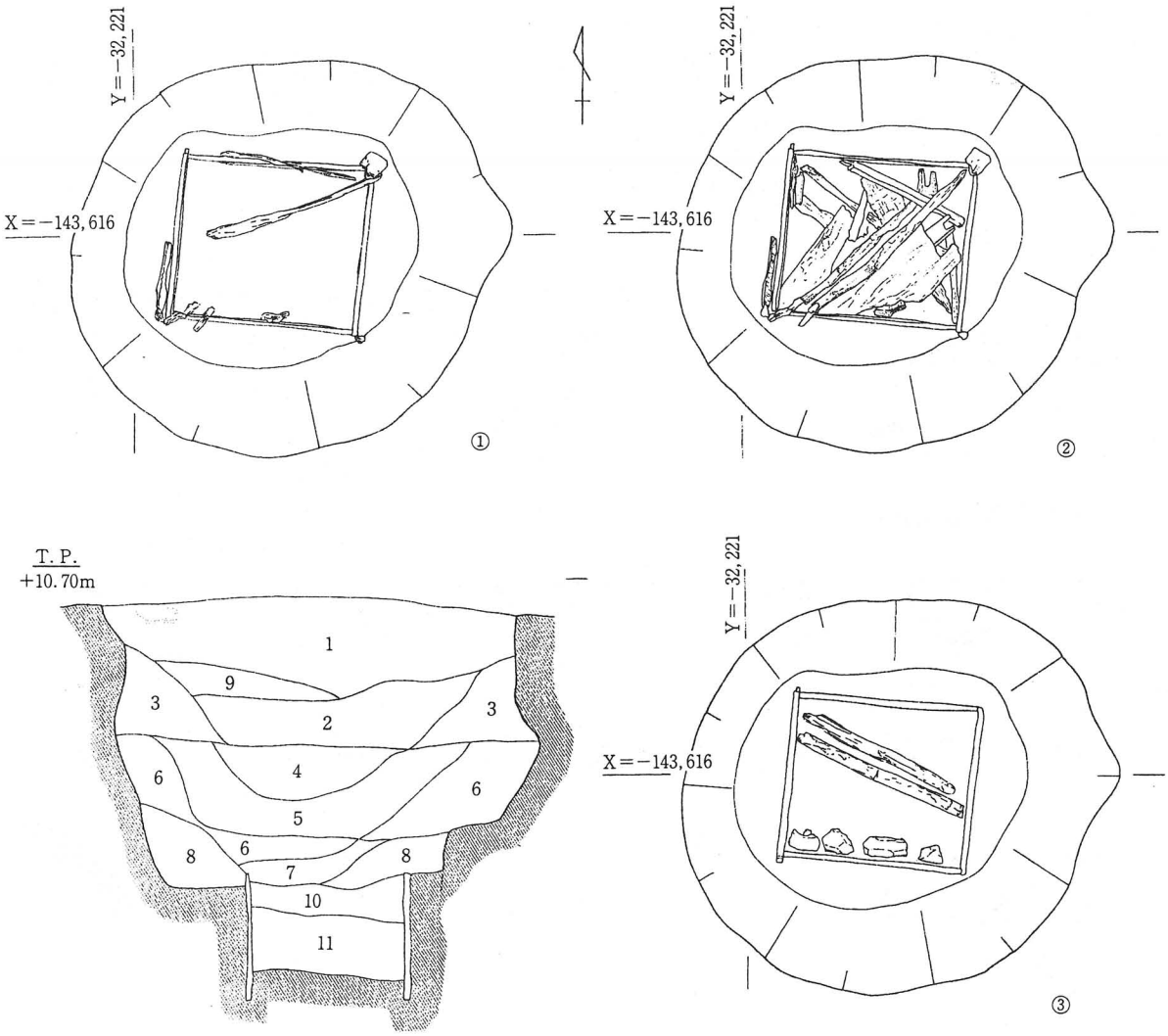
Ｂ５～６、Ｃ５～６区にかけて検出した。楕円形を呈し、長径約1.87m、短径約0.8m、深さ約0.3mを測る。埋土は黒灰色土、黒灰色粘質土である。遺物は弥生土器の甕がほぼ中央から1個体出土している。

ＳＫ－２１２（第17図）

Ｂ４～５区にかけて検出した。ほぼ隅丸の長方形を呈し、長径約3.1m、短径約0.8m、深さ約0.38mを測る。埋土は暗灰色土、暗灰色粘質土、灰色粘質シルトである。遺物は出土していない。

ＳＫ－２１３（第17図）

Ａ８区で検出した。楕円形を呈し、長径約1.0m、短径約0.8m、深さ約0.2mを測る。埋土は暗茶



1　暗茶褐色土
2　暗灰黄色砂質土
3　茶褐色土
4　灰色砂質土
5　灰白色砂混じり暗灰色土
6　暗灰色粘質土
7　灰色砂混じり粘土
8　暗灰青色粘土
9　茶褐色砂質土
10　暗灰色砂混じり土
11　暗灰色粘土（砂混じり）

第19図　ＳＥ−２０１　平・断面・遺物出土状況図

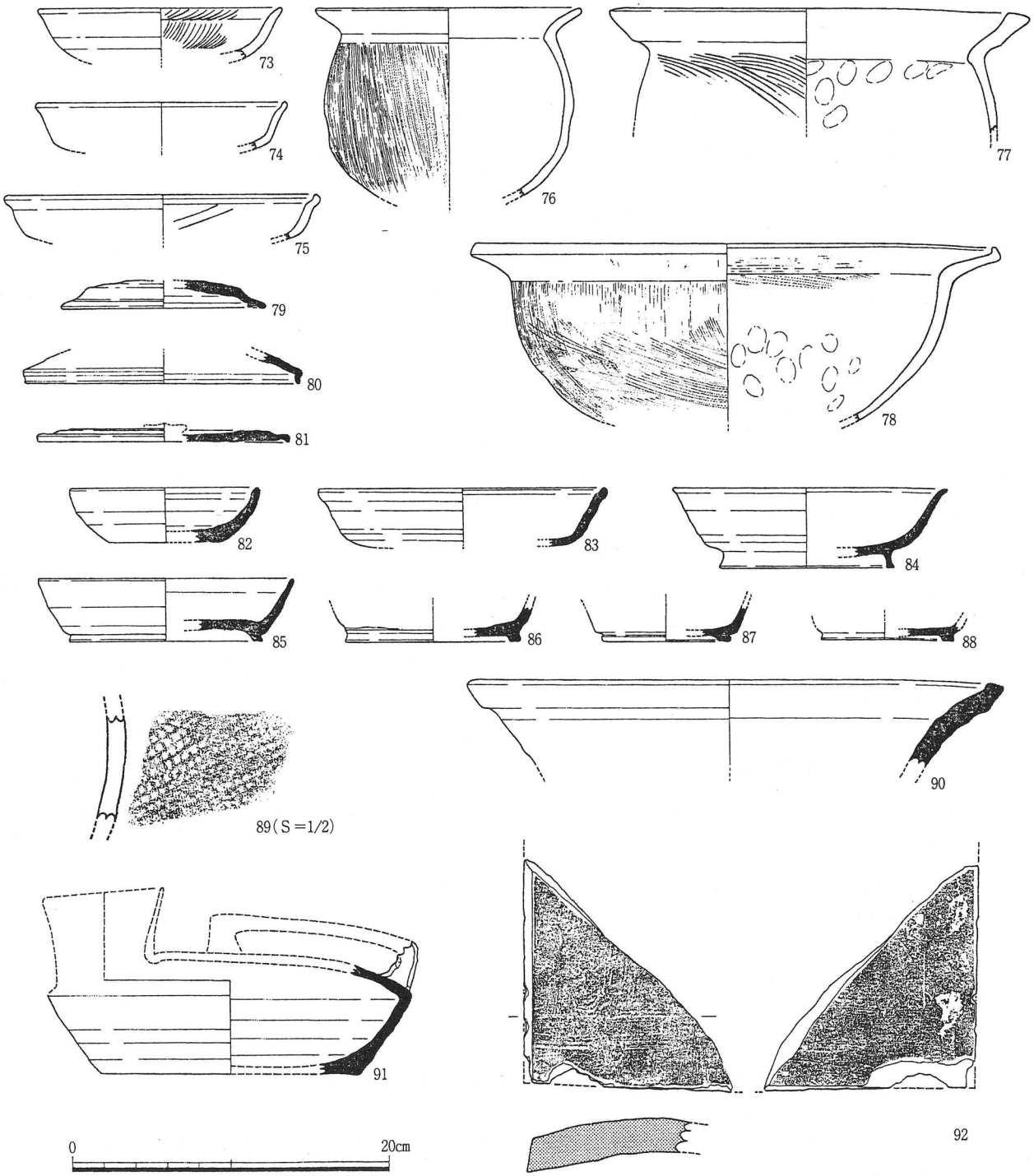
褐色土、暗茶褐色粘質土、砂礫混暗灰色土、黒灰色粘土である。遺物は土師器、須恵器、瓦器、瓦質土器、瓦、臼玉などが出土している。

ＳＫ−２１４

Ａ３〜４区にかけて検出した。不定形を呈し、長径約5.4m、短径約1.75、深さ約0.38mを測る。埋土は灰色粘質土、黄灰色粗砂である。遺物は土師器、須恵器、瓦などが出土している。

ＳＫ−２１５

Ａ４区で検出した。ほぼ楕円形を呈し、長径約2.2m、短径約1.2m、深さ約0.11mを測る。埋土は暗灰色粘土である。遺物は土師器、桃の種核などが出土している。

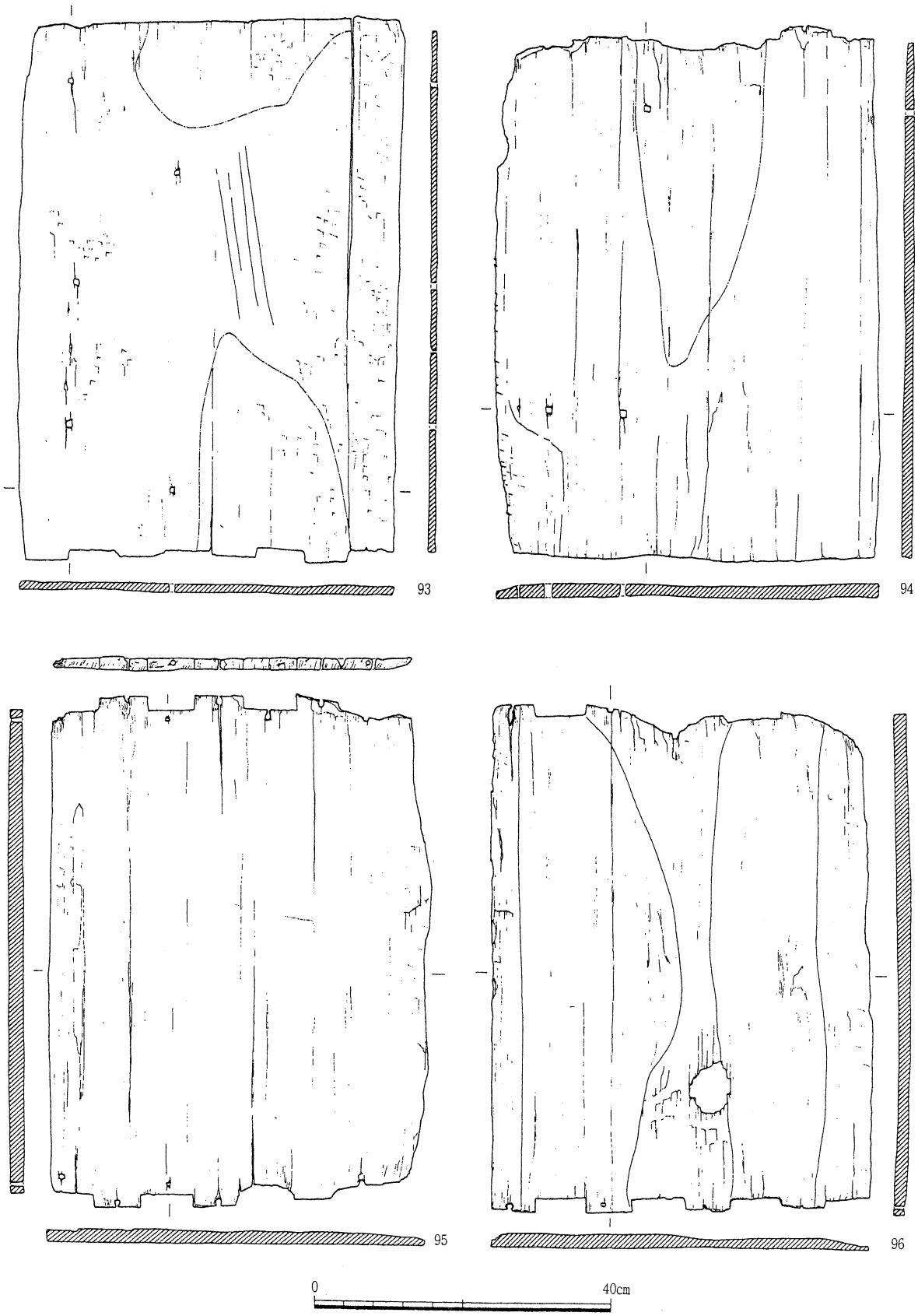


第20図　ＳＥ-２０１　出土遺物(1)

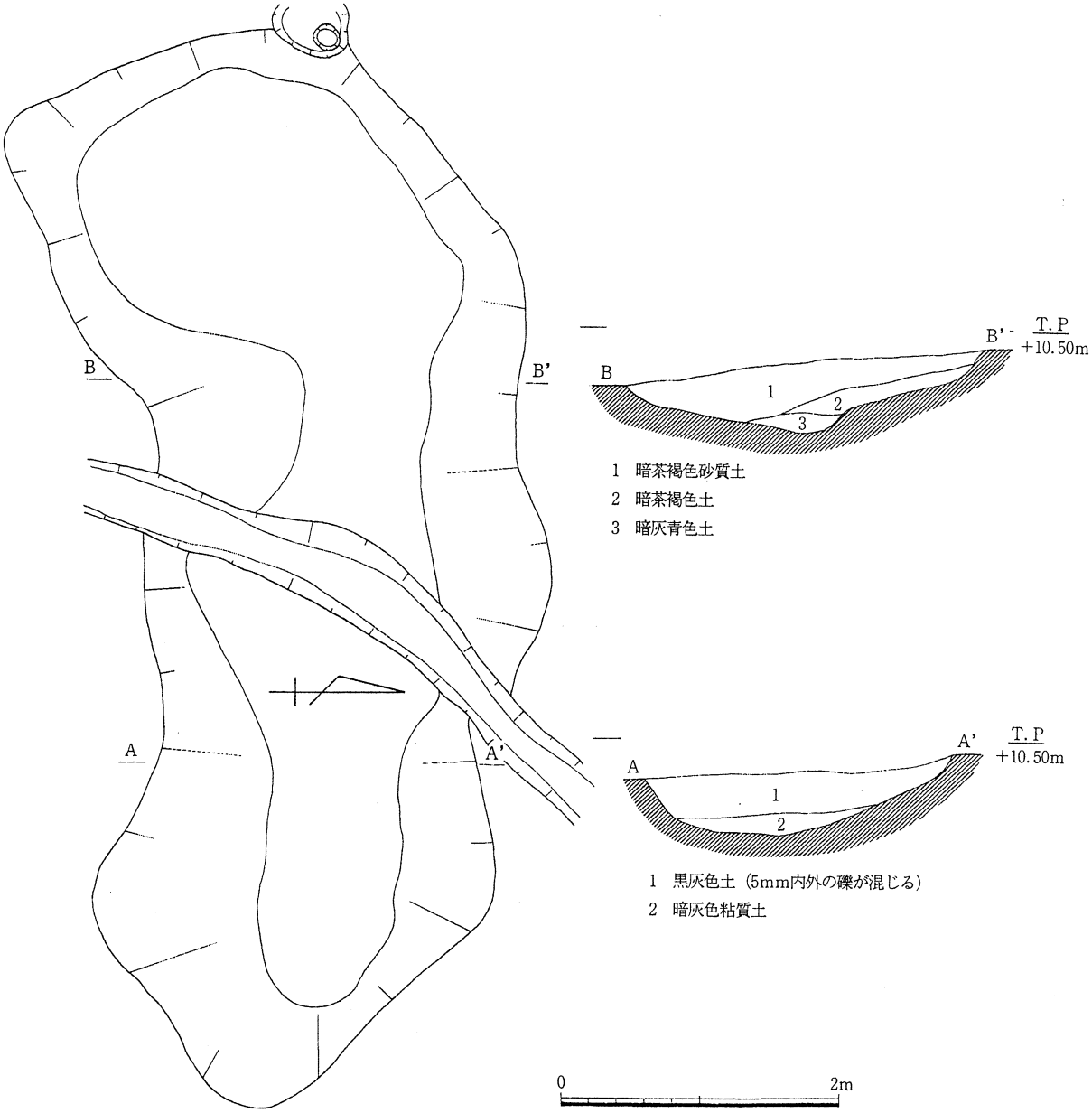
３．井　戸

ＳＥ－２０１（第19図）

Ｄ３区で検出した。ほぼ円形を呈し、径約1.7m、深さ約1.5mを測る。底部には４枚の板材を組み合わせた井戸枠を設置していた。埋土は井戸枠の上部では大きく２層に分かれ、上層は茶褐色土、下層は灰色土～粘土がそれぞれ主体をなし、井戸枠内では暗灰色粘土が主体をなす。遺物の出土は豊富で土師器、須恵器、瓦、桃の種核などが出土し、特に井戸枠内からは自然木が多く出土している。



第21図　ＳＥ－２０１　出土遺物(2)



第22図　ＳＸ-２０１　平・断面図

４．不明遺構

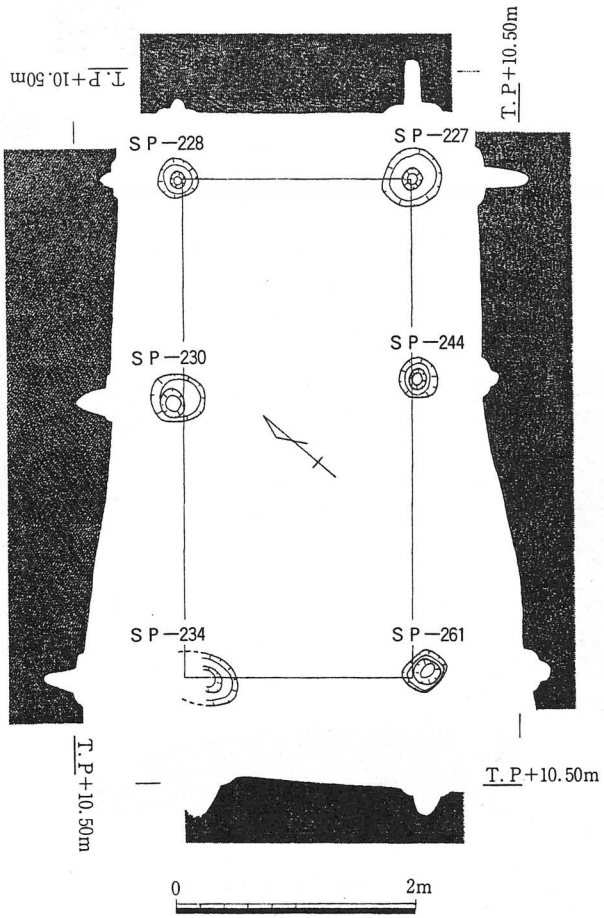
ＳＸ－２０１（第22図）

Ｃ３～４区で検出した。当初、不明なものとして検出したが、大型の土坑である。不定形を呈し、長径約8.0m、短径約3.0m、深さ約0.45mを測る。埋土は黒灰色土、暗灰色粘質土である。遺物は土師器、須恵器、弥生土器などが出土している。

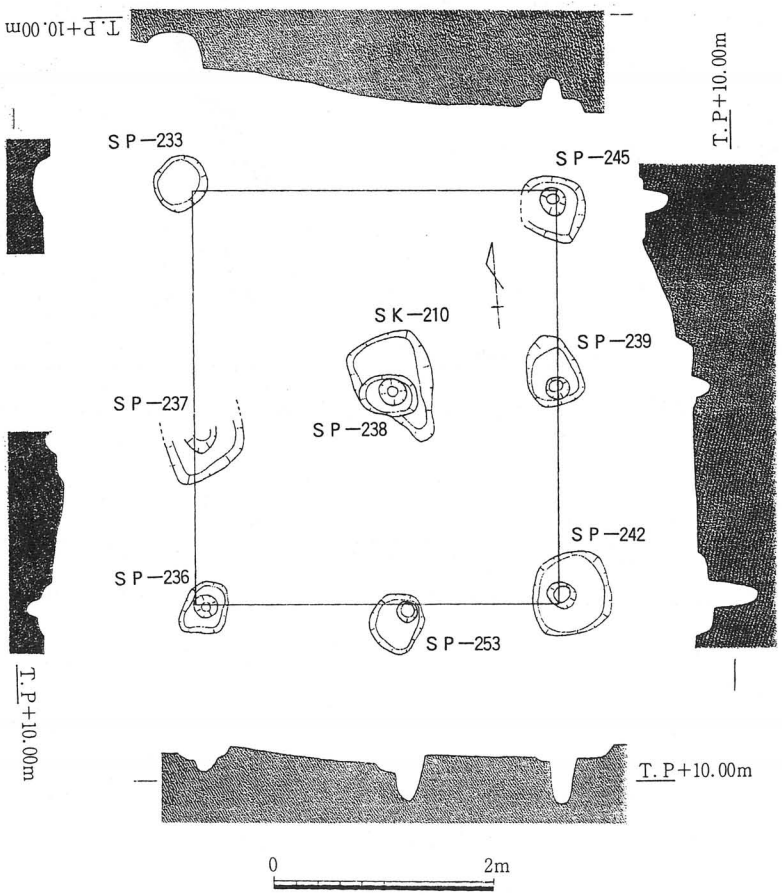
５．掘立柱建物

ＳＢ－２０１（第23図）

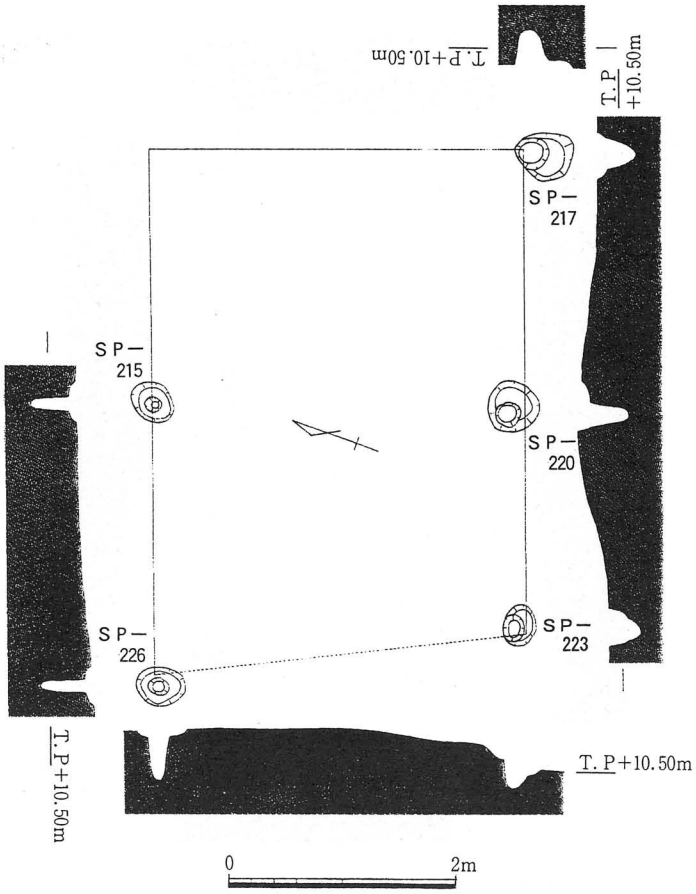
Ｄ２～３区にかけて位置し、ＳＢ－２０２と重複する。規模は桁行2間（4.2m）、梁行1間（1.9m）、面積は約8.0㎡である。柱穴は円～楕円形を呈し径0.35～0.5m、深さ0.15～0.45mを測り、柱間は1.8～2.4mを測る。主軸方向はＮ－50°－Ｅである。遺物は土師器、須恵器などが出土している。



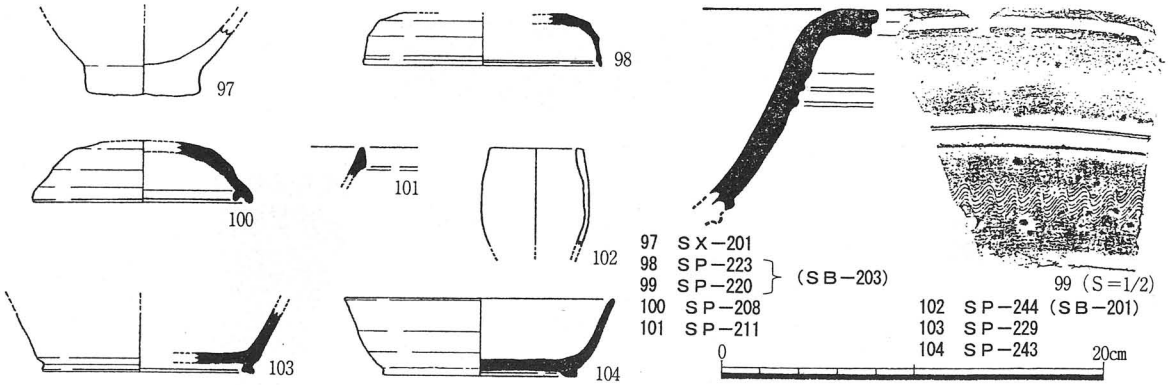
第23図　ＳＢ−２０１ 平・断面図



第24図　ＳＢ−２０２ 平・断面図



第25図　ＳＢ-２０３ 平・断面図



第26図　第２遺構面　不明遺構（SX）・掘立柱建物（SB）・柱穴（SP）出土遺物

ＳＢ－２０２（第24図）

Ｃ３～Ｄ３区にかけて位置する総柱の掘立柱建物で、ＳＢ－２０１と重複する。規模は桁行2間（3.8m）、梁行２間（3.3m）、面積は約12.5㎡である。柱穴は隅丸方形のものが主体をなし、径0.5～0.7m、深さ0.2～0.55mを測り、柱間は1.4～2.0mを測る。主軸方向はＮ－8°－Ｅである。遺物は土師器、須恵器などが出土している。

ＳＢ－２０３（第25図）

Ｄ４～５区にかけて位置する。規模は桁行2間（4.3m）、梁行1間（3.3m）、面積は約14.2㎡である。柱穴は円～楕円形を呈し径0.35～0.5m、深さ0.3～0.45mを測り、柱間は1.9～3.2mを測る。主軸方向はＮ－70°－Ｅである。遺物は土師器、須恵器などが出土している。

第5章　まとめ

元粉遺跡においては今回が初めてとなる本格的な発掘調査であった。その結果、縄文時代から近世に至る複合遺跡であることが明らかとなり、本遺跡の実態はもちろんのこと、鍋田川流域に展開する歴史を解明する上でも貴重な成果を得ることができた。以下、各時期の調査成果について概括し、まとめとしたい。

〔縄文時代〕

遺構は検出されなかったが、後～晩期にかけての粗製土器片十数点が包含層から出土している。西に隣接する中垣内遺跡では北白川Ｃ式の土器が伴う土坑と考えられている遺構が検出されており[(1)]、また南に約150m離れた地点で検出された鍋田川の旧河川と考えられる自然河川跡からは前～晩期にかけての土器片が比較的まとまって出土している[(2)]。さらに東に隣接する鍋田川遺跡では早期末～前期初頭の可能性のある土器片、後・晩期の土器片などが出土している[(3)]。

中垣内遺跡で検出した土坑と考えられている遺構の評価については今後の検討に委ねられる部分が大きいが、上述した土器の中にはあまり磨耗を受けていないものも見受けられることから、やはり鍋田川周辺の丘陵・段丘及び扇状地上に集落の存在した可能性を充分示すものと思われる。

〔弥生時代〕

今回の調査では中期前半（第Ⅱ様式）の甕が伴う土坑（ＳＫ－２１１）が検出され、また地山面に接地する状況でやはり同時期の無頸壺が完全な形で蓋を伴って出土している[(4)]。

市域において中期前半（第Ⅱ様式）の遺構が確認されたのは今回の調査事例が初めてであり、遺物の出土についても本遺跡を除いては、昭和32年に西諸福遺跡で出土・採集された遺物[(5)]、鍋田川遺跡での出土遺物[(6)]、平成6年度調査時における中垣内遺跡での土器溜まりの状態での出土が見られる程度である[(7)]。

これらの出土状況についてみると、今回の調査地から西諸福遺跡出土地点まではほぼ東に約4.5km、鍋田川遺跡出土地点までは詳細は明らかでないもののおよそ東に約250m、平成6年度中垣内遺跡調査における出土地点までは北西に約150mという、それぞれ離れた地点に位置するといった状況である。また中垣内遺跡の弥生集落の中心部分になると思われる一帯では前期と中期後半の集落が確認されているが[(8)]、ちなみにそれまでの距離は今回調査地から南西に約400m離れている。

以上の状況からすると、西諸福遺跡は明らかな別集落であり、他の弥生集落遺跡も含めた総合的な評価を要するものであるが、中垣内遺跡の弥生集落を中心とした地域では、中期前半（第Ⅱ様式）の様相については内容的に十分とは言えないものの、広い範囲に散見される状況が窺えるものである。その状況が集落の移動、あるいは集落域内における構造的な変化であるのかは今後の検討課題ではあるが、今回の調査事例はこれらの弥生集落の変遷を考える上で貴重な成果であったと思われる。

鍋田川流域における弥生集落の変遷過程における様相、また弥生集落の構造性などの問題については重要な検討課題であり、今後の調査事例の増加に期待したい。

〔古墳時代〕

今回の調査では中期と考えられる掘立柱建物2棟（ＳＢ－２０１、ＳＢ－２０３）、溝、土坑などを検出した。

周辺では中垣内遺跡で、今回の調査地から北西に約150m離れた地点において後期と考えられている掘立柱建物1棟、水田などが検出されており[(9)]、また寺川遺跡においても東に約150m離れた地点にお

いて後期から飛鳥時代にかけての掘立柱建物2棟が確認されている。[10]

以上のことから、鍋田川右岸に広がる低位段丘上に中～後期にかけての集落跡が展開するものと思われ、今回はその南端部分を確認したものと考えられる。

〔奈良時代〕

総柱の掘立柱建物1棟（ＳＢ－２０２）、井戸枠を有する井戸、土坑などを検出した。

市域における当該期の集落の存在は北新町遺跡、寺川遺跡などで確認、推定されている。北新町遺跡では井戸が検出され、「⊗」の記号が墨書されている須恵器の蓋と身のセットが出土しており[11]、他にも人面墨書土器、土馬、「厨」と墨書された須恵器片[12]、「美濃」と刻印された須恵器片などが出土している。[13]

また寺川遺跡では「白麻呂」と墨書された須恵器が出土しており[14]、双方ともに一般集落ではない官衙的集落の存在が推測されている。

今回の調査により確認した集落は、古墳時代の集落同様、鍋田川右岸に広がる低位段丘上に展開するものと考えられるが、性格については南端部分をわずかに確認したにすぎず明らかにはし得なかった。ただ、先に述べた寺川遺跡の調査地から南に約200ｍの地点に位置することから、その関連性が注目されるもので、今後の調査事例の増加に期待したい。

〔中世以降〕

包含層の堆積状況から見て少なくとも中世以降は、階段状に造られた耕作地（棚田、段々畑等）であった様相が窺える。それは現代まで連綿と続くもので、また周辺の調査成果においてもほぼ同じ耕作地であった状況が示されている。中世以降、付近一帯は南北に通る東高野街道、東西に通る古堤街道という主要街道沿いにおいて田園風景的な景観を醸しだしていたようである。

（註）

（１）大東市教育委員会　1997年　『中垣内遺跡発掘調査報告書』大東市埋蔵文化財調査報告第11集

（２）大東市教育委員会　2004年　『中垣内遺跡』大東市埋蔵文化財調査報告第21集

（３）大東市教育委員会　1991年　『寺川・鍋田川遺跡発掘調査報告書』大東市埋蔵文化財調査報告第8集

大阪府教育委員会　1992年　『鍋田川遺跡発掘調査概要・Ⅰ』

大阪府教育委員会　1994年　『鍋田川遺跡発掘調査概要・Ⅱ』

（４）今回の出土状況についての評価については、包含層の状況から見て人為的なものとは考えにくいものの、蓋を伴うことからその可能性も捨てがたい。

（５）大東市教育委員会　1973年　『大東市史』

三好孝一　1987年　「西諸福遺跡出土・採集遺物」『寺川・北条遺跡発掘調査報告書』大東市埋蔵文化財調査報告第1集

（６）鍋田川遺跡で採集されたとある。

大東市教育委員会　1987年　『寺川・北条遺跡発掘調査報告書』大東市埋蔵文化財調査報告第1集

（７）SI－02出土土器の長頸広口壺については第Ⅲ様式の古い段階に属する可能性はあるものの、SI－03出土土器については第Ⅱ様式の範疇で捉えたい。

大東市教育委員会　1997年　『中垣内遺跡発掘調査報告書』大東市埋蔵文化財調査報告第11集

（８）大東市教育委員会　2004年　『中垣内遺跡』大東市埋蔵文化財調査報告第20集

（９）註(1)に同じ。

（10）大東市教育委員会　1991年　『寺川・鍋田川遺跡発掘調査報告書』大東市埋蔵文化財調査報告第8集

（11）大東市北新町遺跡調査会　1997年　『北新町遺跡第三次発掘調査概要報告書』

（12）大東市北新町遺跡調査会　1986年　『大東市北新町遺跡第１次発掘調査概要報告書』

（13）大東市教育委員会　1994年　『北新町遺跡発掘調査報告書』大東市埋蔵文化財調査報告第10集

（14）大東市教育委員会　1997年　『寺川遺跡発掘調査報告書』大東市埋蔵文化財調査報告第13集

出土遺物一覧表

挿図番号	器種	出土地点	法量(cm)	色調	胎土	焼成	技法の特徴	備考
1	弥生土器ヵ	第Ⅱ層	長（残） 2.7 厚 0.6	外)暗黒灰褐色 内)にぶい黄橙色 断)暗黒灰色	やや粗	良	内外面ナデ、指押さえ痕、口縁端部に刻目	
2	土師器	第Ⅱ層	長（残） 5.3 厚 0.6	外)にぶい橙色 内)にぶい橙色 断)にぶい橙色	やや粗	良	摩滅のため調整不明であるが、縦方向のハケ目あり	径5mmの穿孔あり
3	須恵器 高杯	第Ⅱ層	底径（復） 11.5 器高（残） 7.1	外)灰白色 内)灰白色 段)灰白色	密	堅 緻	内外面回転ナデ、表面縦方向にヘラ先による線文が数条みられる	
4	陶質土器	第Ⅱ層	長（残） 2.6 厚 0.65	外)青灰色 内)青灰色 断)青灰・灰褐色	密	堅 緻	外面縄席文、内面ナデ、沈線あり	
5	土製円盤	第Ⅱ層	長 4.0 幅 3.8 厚 0.85	外)にぶい黄橙色 内)にぶい黄橙色 断)にぶい黄橙色	やや粗	良	表面剥離しているが一部に指押さえとナデの痕跡、断面に径1mmほどの刺突痕多数あり	土師器より転用
6	銭貨	第Ⅱ層	径 2.65 厚 0.1 重 6.0g					明治期の一銭銅貨
7	銭貨	第Ⅱ層	径 2.65 厚 0.1 重 6.1g					明治期の一銭銅貨
8	土師器	第Ⅶ層	長（残） 5.65 厚 0.6	外)橙色 内)橙色 断)橙色	やや粗	良	外面板ナデ、内面ナデ	器種不明、径5～6mmの穿孔あり
9	土師器 杯	第Ⅶ層	底径(復) 11.6 器高(残) 1.35	外)にぶい橙色 内)にぶい橙色 断)灰白色	密	良 好	内外面ナデ内面に暗文、貼り付け高台	
10	須恵器 杯蓋	第Ⅶ層	口径（復） 10.8 器高 2.8	外)灰色 内)灰白色 断)灰白色	密	堅 緻	内外面回転ナデ、頂部回転ヘラケズリ後に軽いナデ	内面に火ぶくれ（気泡状）あり
11	須恵器 杯蓋	第Ⅶ層	口径(復) 15.5 器高(残) 3.75	外)青灰色 内)青灰色 断)暗青灰色	密	堅 緻	内外面回転ナデ	
12	須恵器 甕	第Ⅶ層	口径（復） 23.1 器高（残） 3.1	外)暗紫灰色 内)赤灰色 断)赤灰色	密	堅 緻	内外面回転ナデ、突帯部付近貼り付け時のヨコナデ	
13	須恵器 器台	第Ⅶ層	長（残） 8.7 厚 0.85	外)灰色 内)灰色 断)灰色	密	堅 緻	内外面回転ナデ、波状文と凸帯文	波状文の断面位置に方形透し孔痕あり
14	銭貨	第Ⅶ層	径 2.4 厚 0.1 重 1.5g					銅銭、明の宣徳通寶とみられる（初鋳 1433年）
15	サヌカイト製 石鏃	第Ⅵ層	長 2.3 幅 1.8 厚 0.3 重 1.0g					凹基式
16	縄文土器 鉢	第Ⅷ層	長（残） 4.3 厚 0.6	外)黒褐色 内)暗褐色 断)褐灰色	粗	良	内外面摩滅のため調整不明、外面に条痕みられる	
17	縄文土器 鉢	第Ⅷ層	長（残） 4.3 厚 0.6	外)褐色 内)褐色 断)褐灰色	やや粗	良	外面に条痕	
18	縄文土器 鉢	第Ⅷ層	長（残） 4.4 厚 0.5	外)黒褐色 内)褐色 断)黄灰色	やや粗	良	外面に条痕	
20	弥生土器 蓋	第Ⅷ層	口径 8.3 器高 1.8	外)淡黄色 内)淡黄色 断)黄灰色	密	良 好	内外面ナデ	双孔が対面に対で穿たれている、内外面一部に黒斑あり
21	弥生土器 無頸壺	第Ⅷ層	口径 7.2 器高 13.6	外)浅黄橙色 内)浅黄橙色 断)	密	良 好	外面ナデ・口縁部ヨコナデ、肩部に8条のクシ状工具による直線文と扇状文施す。	外面底部と体部に黒斑あり、口縁端部付近に双孔2カ所あり
22	土師器 甕	第Ⅷ層	口径（復） 12.4 器高 17.4	外)浅黄橙色 内)浅黄橙色 断)浅黄橙色	密	良 好	外面ヨコナデで一部にハケ目・板ナデ・指押さえがみられる、粘土紐積み上げ痕あり	全体に雑な作り
23	土師器 小型甕	第Ⅷ層	口径（復） 8.5 器高（残） 4.4	外)橙色・灰黄色 内)橙色 断)橙色	粗	良	内外面摩滅のため調整不明	
24	製塩土器	第Ⅷ層	底径 2.0 器高（残） 2.3	外)にぶい黄橙色 内)浅黄色 断)にぶい黄橙色	やや粗	良	手づくね成形、内面に指押さえ痕	二次焼成により赤変土師質
25	土師器 高杯	第Ⅷ層	器高（残） 8.3	外)にぶい橙色 内)にぶい橙色 断)浅黄橙色	やや粗	良	内外面摩耗のため調整不明、内部に絞り痕	
26	土師器 高杯	第Ⅷ層	底径（復） 8.6 器高（残） 6.2	外)にぶい橙色 内)浅黄橙色 断)にぶい黄橙色	やや粗	良	内外面摩耗のため調整不明、内部に絞り痕	
27	土師器 杯	第Ⅷ層	口径（復） 19.4 器高（残） 3.7	外)橙色 内)橙色 断)橙色	密	良	外面ミガキと指押さえ、内面ヨコナデ・暗文	内面の暗文は摩耗により不鮮明
28	土師器 把手	第Ⅷ層	長 4.5 幅 3.4 厚 2.7	外)にぶい黄橙色 断)褐灰色	密	良	表面ナデと指押さえ、一部ハケ目	はめ込み部が残る

挿図番号	器種	出土地点	法量(cm)	色調	胎土	焼成	技法の特徴	備考
29	土師器 把手	第Ⅷ層	長 5.0 幅 3.9 厚 2.2	外)にぶい黄橙色 断)褐灰色	密	良	表面ナデと指押さえ	はめ込み部が残る
30	土師器 把手	第Ⅷ層	長 4.0 幅 3.5 厚 4.8	外)にぶい橙色 断)にぶい褐色	密	良	表面ナデと指押さえ	上面に溝状の切り込み
31	土師器 把手	第Ⅷ層	長 6.3 幅 4.6 厚 4.1	外)にぶい橙色 断)にぶい褐色	密	良	表面ナデと指押さえ	
32	須恵器 蓋	第Ⅷ層	つまみ径 3.7 器高（残） 1.7	外)灰色 内)灰色 断)黄灰色	密	堅緻	外面回転ナデ、内面ナデ、つまみ部ヨコナデ	
33	須恵器 杯身	第Ⅷ層	口径（復） 11.1 器高（残） 3.8	外)黄灰色 内)灰白色 断)黄灰色	密	堅緻	内外面回転ナデ	
34	須恵器 杯身	第Ⅷ層	口径(復) 14.0 器高（残） 4.85	外)灰色 内)灰色 断)黄灰色	密	堅緻	内外面回転ナデ	
35	須恵器 高杯	第Ⅷ層	底径 9.5 器高（残） 6.5	外)灰色 内)灰色 断)灰色	密	堅緻	内外面回転ナデ	
36	須恵器 壺	第Ⅷ層	口径（復） 15.9 器高（残） 5.3	外)灰色 内)灰色 断)暗灰黄色	密	堅緻	内外面回転ナデ	自然釉
37	須恵器 甕	第Ⅷ層	口径（復） 19.0 器高（残） 6.7	外)灰白色 内)灰白色 断)灰白色	密	軟質	内外面回転ナデ	
38	須恵器 甕	第Ⅷ層	口径（復） 22.9 器高（残） 6.5	外)黒褐色 内)褐灰色 断)褐灰色	密	堅緻	内外面回転ナデ、倍面肩部に叩き痕	自然釉
39	須恵器 器台	第Ⅷ層	長（残） 5.2 厚 0.8	外)灰色 内)灰色 断)灰色	密	堅緻	外面回転ナデ、波状文と凸帯文、内面ヨコナデ	
40	須恵器 器台	第Ⅷ層	長（残） 4.5 厚 0.8	外)灰色 内)灰色 断)灰色	密	堅緻	外面回転ナデ、波状文と凸帯文	
41	須恵器 甕	第Ⅷ層	長（残） 8.8 厚 1.1	外)灰色 内)灰色 断)褐灰色	密	堅緻	外面タタキ、内面当て具痕	
42	土師器 羽釜	第Ⅷ層	羽部（復） 30.0 器高（残） 3.8	外)にぶい橙色 内)にぶい橙色 断)にぶい橙色	密	良好	内外面ナデ	
43	滑石製 紡錘車	第Ⅷ層	直径 4.0 厚 0.8 重 11.0g					孔径 0.8 cm
44	サヌカイト製 剥片	第Ⅷ層	長 4.5 幅 3.5 厚 1.1 重 18.0g					
45	サヌカイト製 剥片	第Ⅷ層	長 4.9 幅 3.6 厚 0.5 重 15.3g					
46	サヌカイト製 削器	第Ⅷ層	長 7.8 幅 2.85 厚 0.8 重 21.0g					
47	サヌカイト製 削器	第Ⅷ層	長 8.2 幅 3.8 厚 1.0 重 42.3g					
48	韓式系土器	撹乱	長（残） 4.1 厚 0.6	外)にぶい褐色 内)にぶい黄橙色 断)にぶい黄橙色	やや粗	良	外面格子目タタキ、内面調整不明	
49	須恵器 高台付鉢	撹乱	底径（復） 7.4 器高（残） 4.8	外)灰白色 内)灰白色 段)灰白色	密	堅緻	内外面回転ナデ、底部貼り付け、底面ハケ目、底部側面ヘラ状工具で面取り	
50	須恵器 器台	撹乱	長（残） 3.4 厚 0.9	外)灰色 内)灰色 断)褐灰色	密	堅緻	内外面回転ナデ、波状文と凸帯文	
51	白磁 皿	撹乱	口径（復） 10.6 器高 3.0	外)明緑灰色 内)灰白色 断)灰白色	密	堅緻	内外面回転ナデとヨコナデ、内面体部下方に段あり、輪花口縁、底部のみ露胎	
52	土製円盤	撹乱	長 4.3 幅 4.4 厚 0.9	外)にぶい褐色 内)橙色 断)橙色	やや粗	良	表面ナデ、断面研磨	表面煤付着、土師器甕より転用
53	瓦質円盤	撹乱	長 4.5 幅 4.25 厚 0.9	外)灰白色 内)灰白色 断)灰白色	やや粗	やや不良	表面ナデ、断面研磨	瓦質土器より転用
54	陶製円盤	撹乱	長 2.7 幅 2.75 厚 0.8	外)暗褐色 内)暗褐色 断)灰白色	密	良	表面ヨコナデ施釉、断面研磨	陶器甕より転用
55	砥石	撹乱	長 4.75 幅 3.5 厚 1.2 重 27.4g					

挿図番号	器種	出土地点	法量(cm)	色調	胎土	焼成	技法の特徴	備考
56	須恵器 甕	不明	長（残） 4.6 厚 0.7	外)灰白色 内)灰白色 断)灰白色	密	やや軟質	外面綾杉文タタキ、内面指押さえ	
57	土師器 風炉	不明	口径（復） 18.4 器高（残） 4.9	外)にぶい黄橙色 内)黒褐色 断)にぶい黄橙色	密	良	外面ヨコナデ、内面付着物のため調整不明	3ヶ所に径3～6mmの穿孔あり
58	須恵器 杯身	SD－201	口径（復） 9.8 器高 4.4	外)赤灰色 内)青灰色 断)灰赤色	密	堅緻	外面回転ナデ、外面底部回転ヘラケズリ	
59	須恵器 壺	SD－201	長（残） 4.1 厚 0.6	外)灰色 内)灰色 断)灰色	密	堅緻	内外面回転ナデ、外面にクシ描き波状文あり、外面自然融	
60	ｻﾇｶｲﾄ製 剥片	SD－203	長 2.65 幅 1.9 厚 0.3 重 2.0g					石鏃未製品？
61	須恵器 杯蓋	SD－204	口径(復) 10.5 器高 4.45	外)灰色 内)灰色 断)褐灰色	密	堅緻	内外面回転ナデ、頂部回転ヘラケズリ	全体に自然釉
62	須恵器 高杯	SD－204	口径（復） 9.8 器高 5.1	外)灰色 内)灰色 断)黄灰色	密	堅緻	内外面ヨコナデ、脚部透孔の分割線がみられる	
63	砥石	SK－201	残長 8.0 幅 4.0 厚 2.0 重 57.8g					一部に提げていたとみられる紐巻き痕あり、各面に擦痕がみられる
64	ｻﾇｶｲﾄ製 楔形石器	SK－201	長 2.0 幅 2.4 厚 0.55 重 2.8g					
65	白磁 椀	SK－204	長（残） 1.1 厚 0.4	釉)灰ｵﾘｰﾌﾞ色 断)灰白色	密	良	内外面回転ナデ、口縁部外面回転ケズリ	
66	土師器 甕	SK－209	口径（復） 22.4 器高（残） 8.0	外)にぶい橙色 内)浅黄橙色 断)浅黄橙色	密	堅緻	内外面ハケ目、口縁部および頸部外面ヨコナデ	内外面煤付着
67	須恵器 杯身	SK－209	高台径(復) 11.6 器高（残） 1.3	外)灰ｵﾘｰﾌﾞ色 内)灰ｵﾘｰﾌﾞ色 断)灰ｵﾘｰﾌﾞ色	密	堅緻	一部回転ナデ痕残る、底部内外面はナデ、高台付近は貼り付け時のヨコナデ	
68	弥生土器 甕	SK－211	口径 14.2 器高 17.5	外)黒褐色 内)黒褐色 断)褐灰色	密	良好	体部外面かなり剥離・摩滅が激しい。口縁端部に刻み目無く波状文を施す	二次焼成を受け煤付着
69	須恵器 杯蓋	SK－213	口径（復） 14.1 器高（残） 1.4	外)灰色 内)灰白色 断)灰白色	密	堅緻	内外面回転ナデとナデ	つまみ部欠
70	須恵器 杯身	SK－213	口径(復) 11.8 器高(残) 4.35	外)灰色 内)灰色 断)黄灰色	密	堅緻	内外面回転ナデ、底面回転ヘラケズリ	自然釉
71	滑石製 臼玉	SK－213	残長 0.45 直径 0.55 重 0.2g					
72	ｻﾇｶｲﾄ製 石鏃	SK－213	長 2.15 幅 1.6 厚 0.35 重 0.8g					凹基式
73	土師器 杯	SE－201	口径（復） 15.2 器高（残） 3.2	外)にぶい橙色 内)にぶい橙色 断)にぶい黄橙色	密	良好	外面ヨコナデ・ミガキとケズリ、内面ヨコナデ・ミガキ	内面に暗文
74	土師器 杯	SE－201	口径（復） 15.8 器高（残） 3.0	外)にぶい橙色 内)にぶい橙色 断)にぶい橙色	密	良好	外面回転ナデ、口縁部から内面ヨコナデ	
75	土師器 皿	SE－201	口径（復） 19.5 器高（残） 2.9	外)橙色 内)橙色 断)橙色	密	良	内外面ヨコナデ	内面に暗文
76	土師器 甕	SE－201	口径（復） 16.6 器高（残） 13.3	外)淡赤橙色 内)にぶい橙色 断)淡橙色	密	堅緻	外面ハケ目とヨコナデ、内面指押さえとナデ	
77	土師器 甕	SE－201	口径（復） 23.0 器高（残） 7.9	外)明褐色 内)橙色 断)にぶい稲灰色	密	良好	外面ヨコナデ・ハケ目、内面ヨコナデ・指押さえ	
78	土師器 鍋	SE－201	口径（復） 32.0 器高（残） 11.5	外)浅黄橙色 内)浅黄橙色 断)浅黄橙色	密	良好	外面ナデとハケ目、指押さえ、内面ハケ目と指押さえ	
79	須恵器 杯蓋	SE－201	口径（復） 12.7 器高（残） 1.8	外）灰色 内）灰色 断）灰色	密	堅緻	外面回転ナデ、内面回転ナデ・ヨコナデ	つまみ部欠
80	須恵器 杯蓋	SE－201	口径（復） 17.0 器高（残） 2.1	外)灰白色 内)灰白色 断)灰白色	密	堅緻	内外面回転ナデ	
81	須恵器 杯蓋	SE－201	口径（復） 15.8 器高（残） 0.8	外)灰色 内)ｵﾘｰﾌﾞ灰色 断)灰色	密	堅緻	外面回転ナデ、内面回転ナデ・ヨコナデ	つまみ部欠
82	須恵器 杯身	SE－201	口径（残） 11.9 器高 3.4	外)灰白色 内)暗灰色 断)灰白色	密	堅緻	内外面回転ナデとヨコナデ、底部粗雑なヘラケズリ	内外面口縁部～体部にかけて炭素吸着

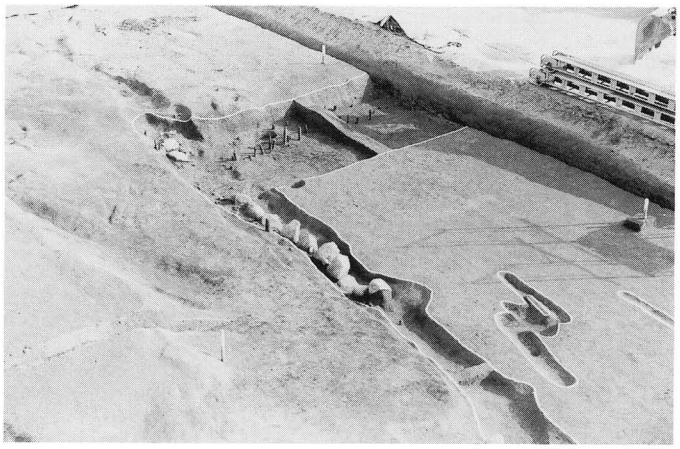
挿図番号	器種	出土地点	法量(cm)	色調	胎土	焼成	技法の特徴	備考
83	須恵器 杯身	SE−201	口径（復） 18.2 器高（残） 3.8	外)灰白色 内)灰白色 断)灰白色	密	堅緻	外面回転ナデ、内面回転ナデ・ヨコナデ	口縁部土師器杯身を模倣？
84	須恵器 杯身	SE−201	口径（復） 17.0 器高（残） 5.2	外)ｵﾘｰﾌﾞ灰色 内)ｵﾘｰﾌﾞ灰色 断)灰色	密	堅緻	外面回転ナデ、内面回転ナデ・ヨコナデ	
85	須恵器 杯身	SE−201	口径（復） 16.0 器高（残） 4.1	外) 灰色 内) 灰色 断) 灰色	密	堅緻	外面回転ナデ、貼り付け高台(未調整)、内面回転ナデ・ヨコナデ	
86	須恵器 杯身	SE−201	底径（復） 10.0 器高（残） 2.1	外)灰色 内)ｵﾘｰﾌﾞ灰色 断)灰色	密	堅緻	外面回転ナデ、内面回転ナデ・ヨコナデ、貼り付け高台	
87	須恵器 杯身	SE−201	底径（復） 8.0 器高（残） 2.1	外)灰白色 内)灰白色 断)灰白色	密	堅緻	外面回転ナデ、内面回転ナデ・ヨコナデ、貼り付け高台	
88	須恵器 杯身	SE−201	底径（復） 8.0 器高（残） 1.3	外)灰色 内)灰色 断)灰色	密	堅緻	外面回転ナデ、内面回転ナデ・ヨコナデ、貼り付け高台	
89	韓式系土器	SE−201	長（残） 3.0 厚 0.5	外)にぶい黄橙色 内)にぶい黄橙色 断)にぶい黄橙色	密	良	外面格子目タタキ、内面調整不明	
90	須恵器 甕	SE−201	口径（復） 32.0 器高（残） 5.5	外)黄灰色 内)灰色 断)黄灰色	密	堅緻	内外面ナデとケズリ状のナデ	口縁部外面灰被り（自然釉）
91	須恵器 把手付平瓶	SE−201	底径（復） 16.4 器高（残） 7.0	外)灰白色 内)灰白色 断)灰白色	密	堅緻	内外面回転ナデ、底部回転ヘラケズリ後にナデ	
92	平瓦	SE−201	長（残） 14.3 幅（残） 13.1 厚 2.4	外)黄灰色 内)黄灰色 断)灰白色	密	堅緻	外面ヘラケズリ、内面布目痕	硬質
93	木製品 井戸枠	SE−201	長（残） 73.8 幅（残） 52.0 厚 1.2					針葉樹（杉カ）、方形孔5ヶ所あり、火を受けた痕跡あり
94	木製品 井戸枠	SE−201	長（残） 70.8 幅（残） 51.4 厚 2.0					針葉樹（杉・樅カ）、方形孔3ヶ所・丸孔1ヶ所あり、火を受けた痕跡あり
95	木製品 井戸枠	SE−201	長（残） 70.0 幅（残） 51.4 厚 2.0					両端に加工部に釘孔、側面から横方向に釘孔あり
96	木製品 井戸枠	SE−201	長（残） 66.0 幅（残） 51.0 厚 2.2					数カ所に釘孔あり、火を受けた痕跡あり
97	弥生土器 壺	SX−201	底径 6.0 器高（残） 3.6	外)にぶい黄橙色 内)にぶい橙色 断)にぶい橙色	やや粗	良	底面未調整、内外面摩滅のため調整不明	底部
98	須恵器 杯蓋	SP−223	口径（復） 12.5 器高（残） 2.7	外)緑灰色 内)緑灰色 断)緑灰色	密	堅緻	内外面回転ナデとヨコナデ、頂部ヘラケズリ	ＳＢ−２０３
99	須恵器	SP−220	器高（残） 6.4	外)灰色 内)灰色 断)灰色	密	堅緻	内外面回転ナデ、外面にクシ描き波状文あり	ＳＢ−２０３
100	須恵器 杯蓋	SP−208	口径（復） 11.5 器高（残） 3.2	外)明ｵﾘｰﾌﾞ灰色 内)灰白色 断)灰白色	密	堅緻	内外面回転ナデとヨコナデ、頂部粗雑なヘラケズリ	
101	白磁 椀	SP−211	長（残） 1.5 厚 0.6	釉)灰白色 断)灰白色	密	良	内外面回転ナデ、口縁部外面回転ケズリ	
102	製塩土器	SP−244	口径（復） 4.9 器高（残） 5.2	外)にぶい黄橙色 内)にぶい黄橙色 断)灰色	やや粗	良	手づくね成形、内外面ナデ、内面に指押さえ痕	二次焼成により黒化土師質 ＳＢ−２０１
103	須恵器 杯身	SP−229	底径（復） 11.0 器高（残） 3.3	外)ｵﾘｰﾌﾞ灰色 内)ｵﾘｰﾌﾞ灰色 断)ｵﾘｰﾌﾞ灰色	密	堅緻	外面回転ナデ、貼り付け高台、内面回転ナデ・ヨコナデ	
104	須恵器 杯身	SP−243	口径（復） 10.2 器高 4.1	外)灰白色 内)灰白色 断)灰白色	密	堅緻	外面回転ナデ、貼り付け高台、内面回転ナデ・ヨコナデ	

図　　版

図版1　遺構(1)

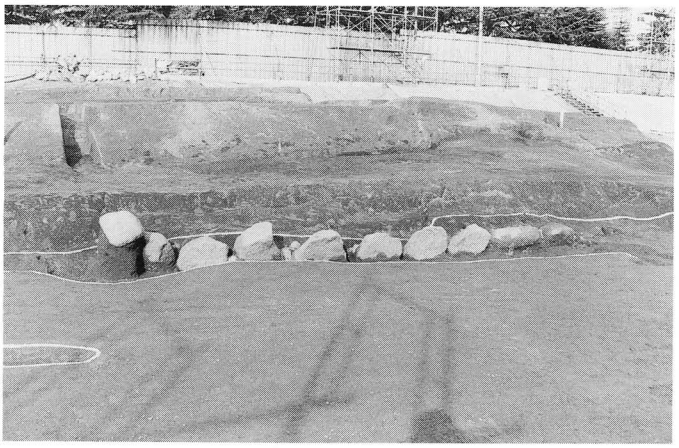
1．第１遺構面全景（北西より）

2．ＳＤ－１０１北側(西より)



3．ＳＤ－１０１南側(西より)

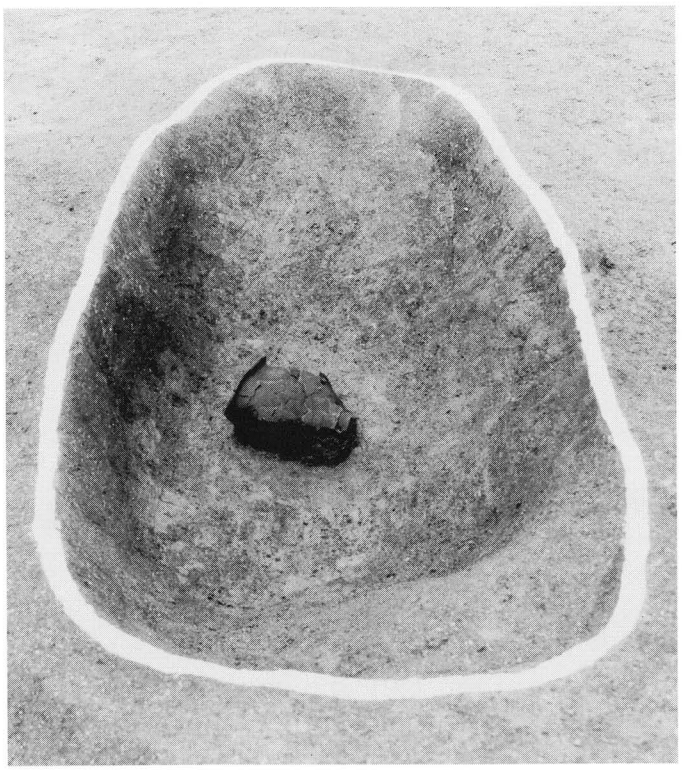
4．ＳＤ－１０１内　杭列



5．ＳＤ－１０１内　石列

図版2　遺構(2)

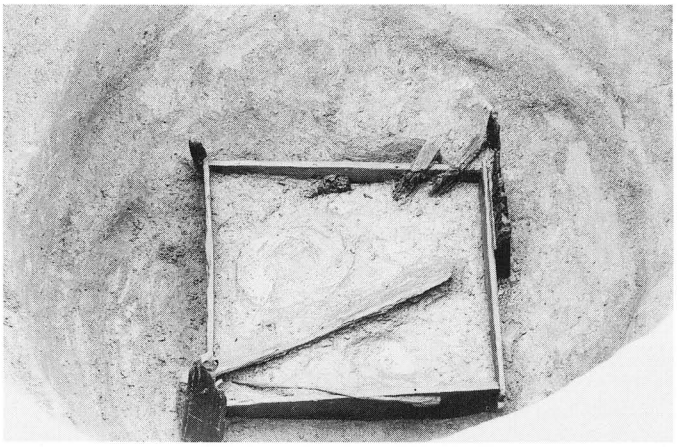
1．第２遺構面全景(西より)



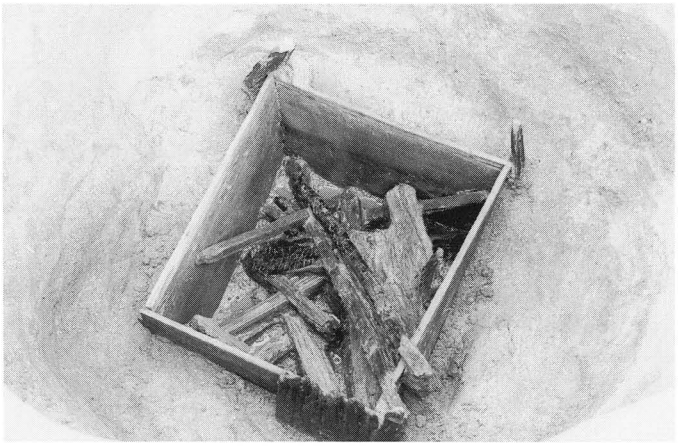
2．ＳＫ－２１１（南より）

3．ＳＫ－２１１遺物出土状況(東より)

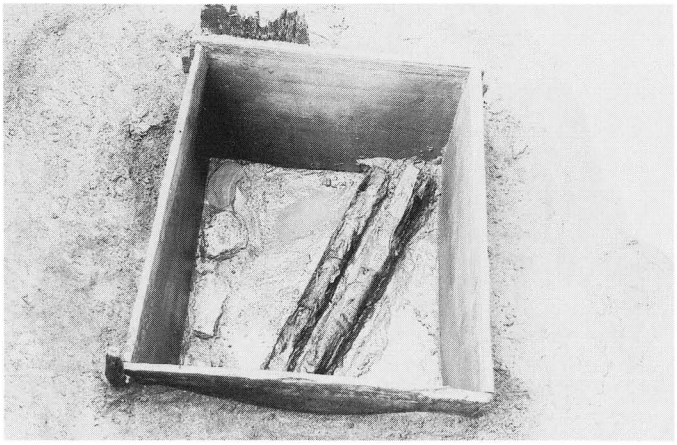
1．ＳＥ－２０１（北より）



2．井戸枠内遺物出土状況①



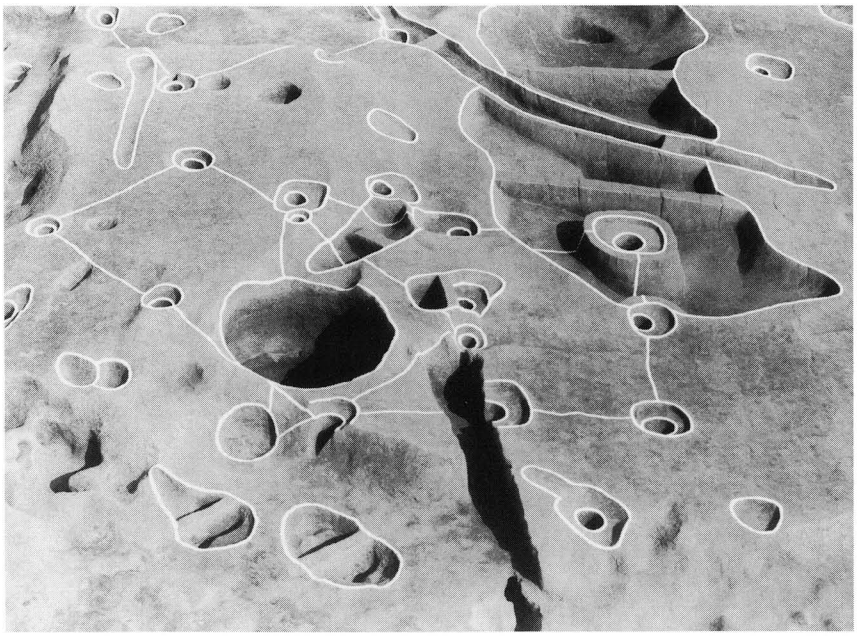
3．井戸枠内遺物出土状況②



4．井戸枠内遺物出土状況③

5．井戸枠内完掘状況

図版4　遺構(4)

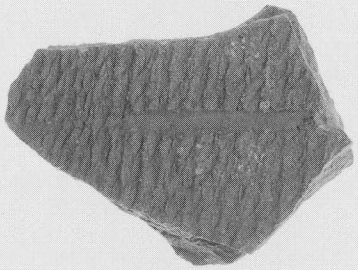


SB－201．202

SB－203

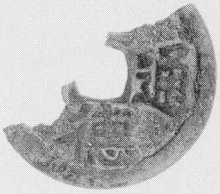
弥生土器（無頸壺）出土状況（東より）

図版5　出土遺物(1)

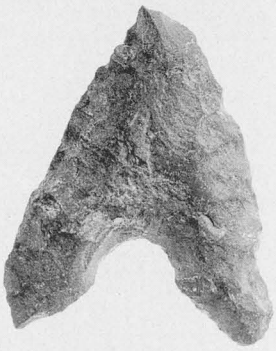


4

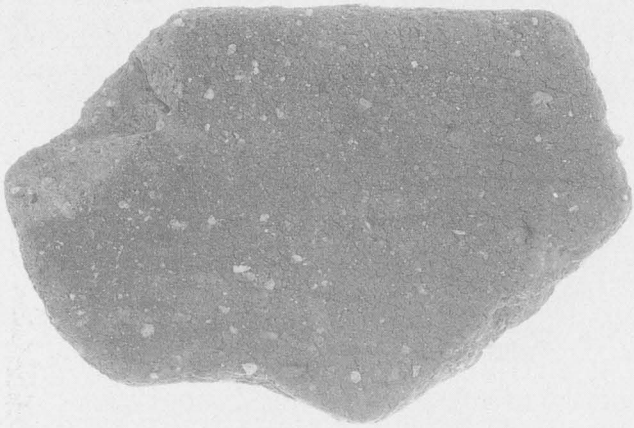
7



14



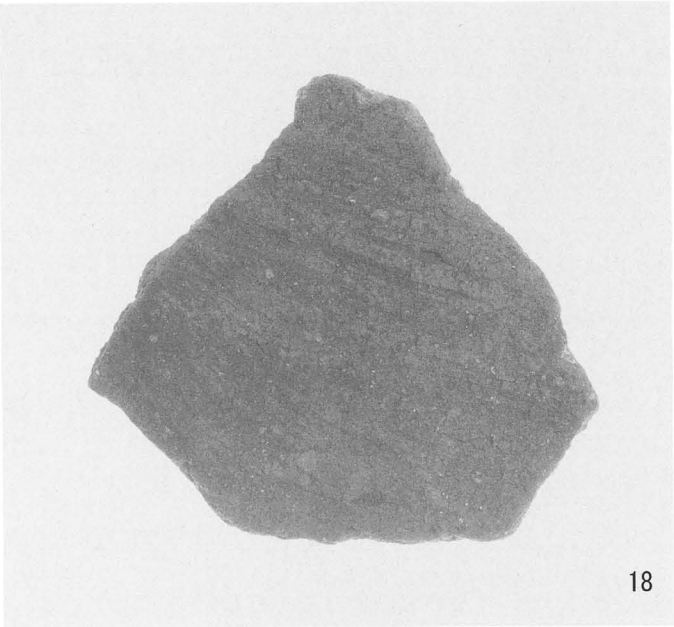
15

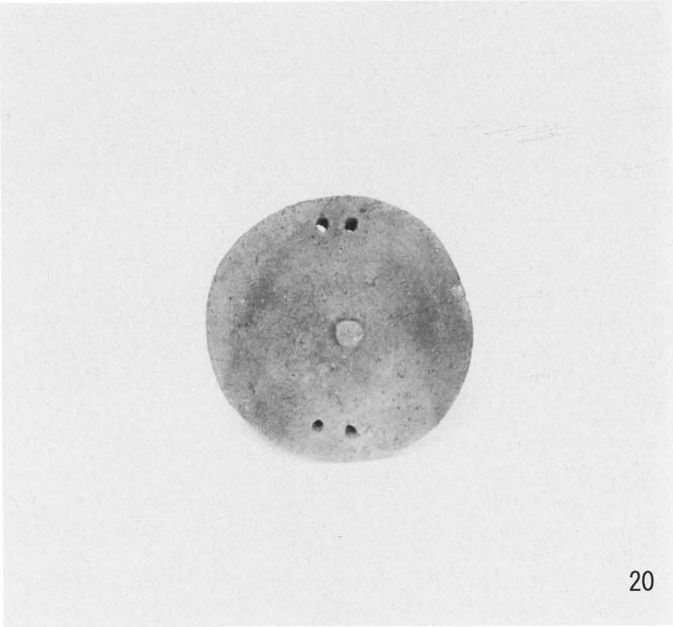


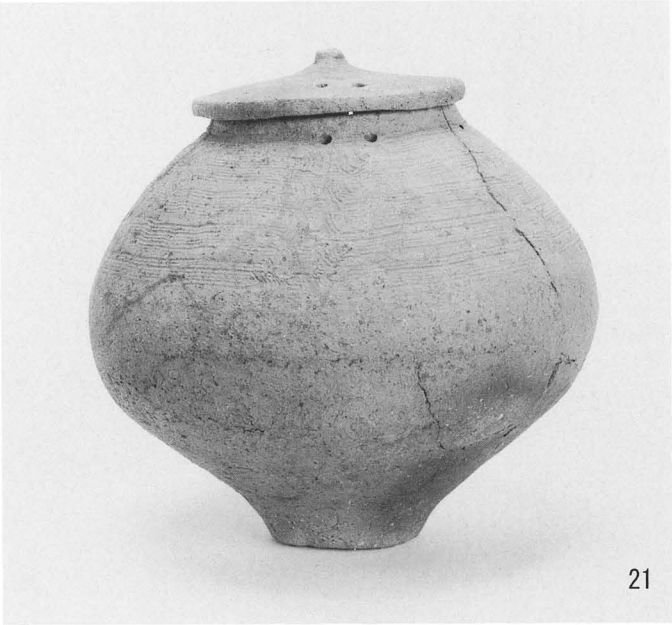
16

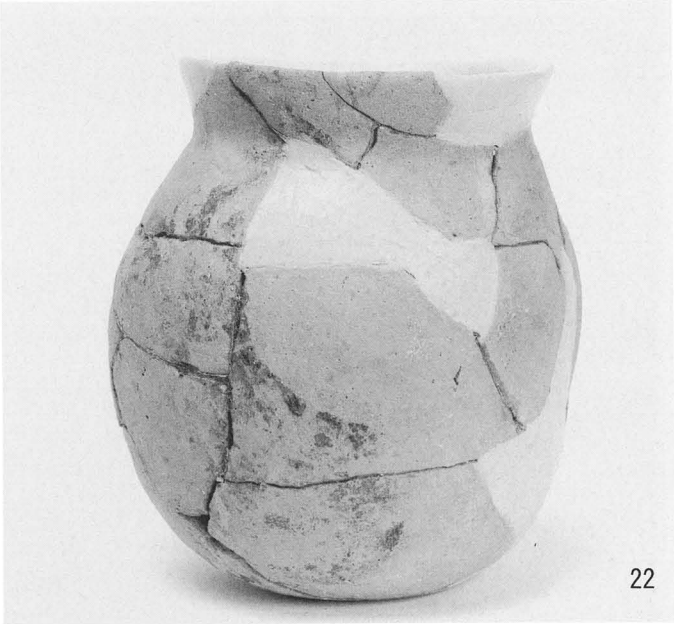
17

図版6　出土遺物(2)


18


20

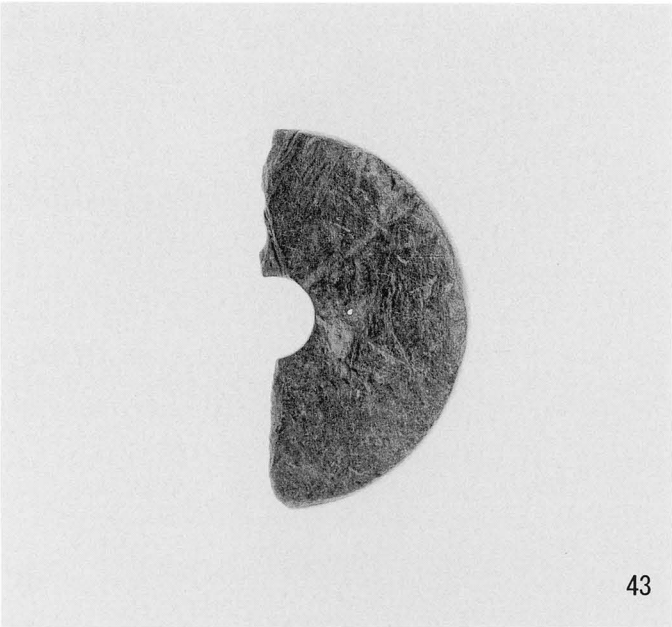

21

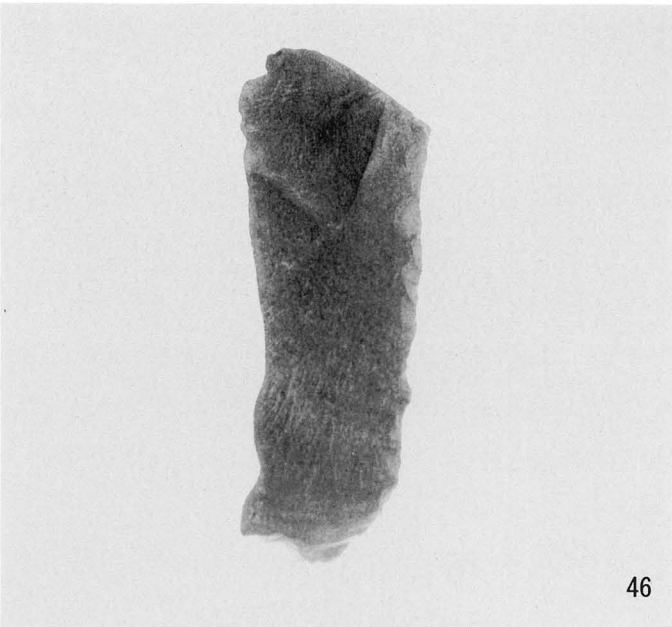

22

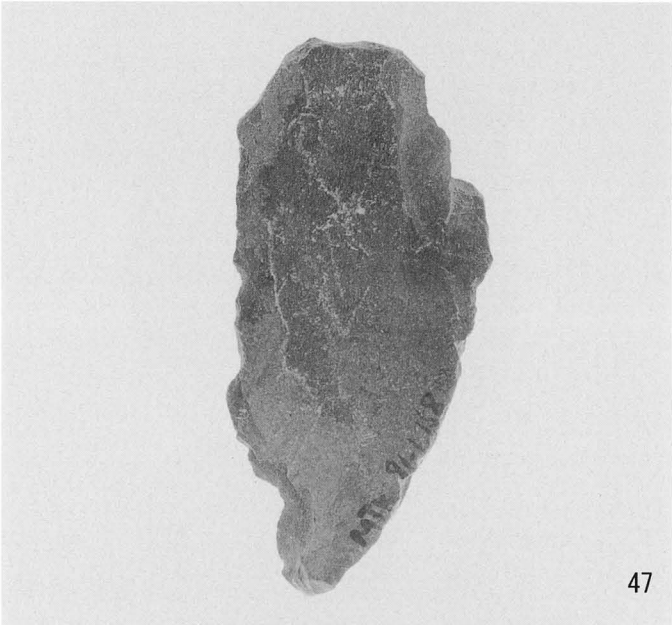
35

38

図版7　出土遺物(3)


43


46


47

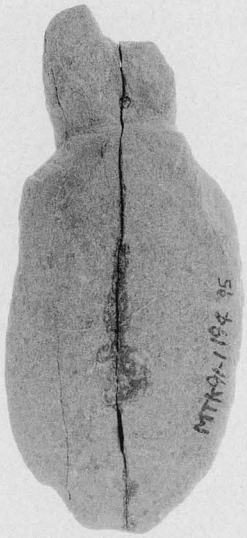
48

58

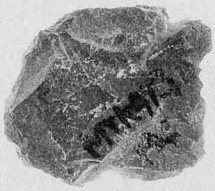
61

図版8　出土遺物(4)

62



63



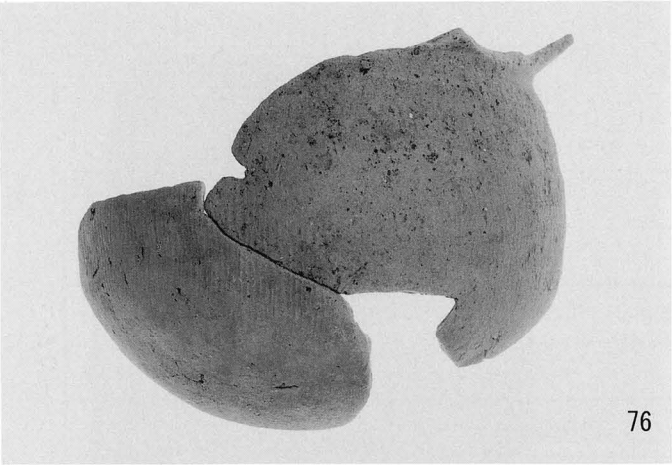
64

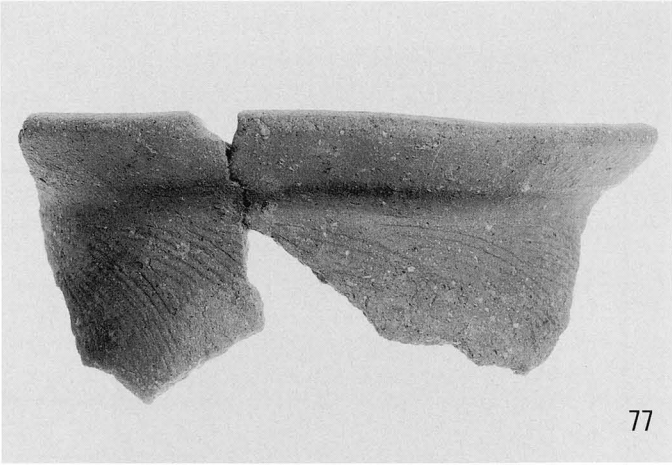
68

71

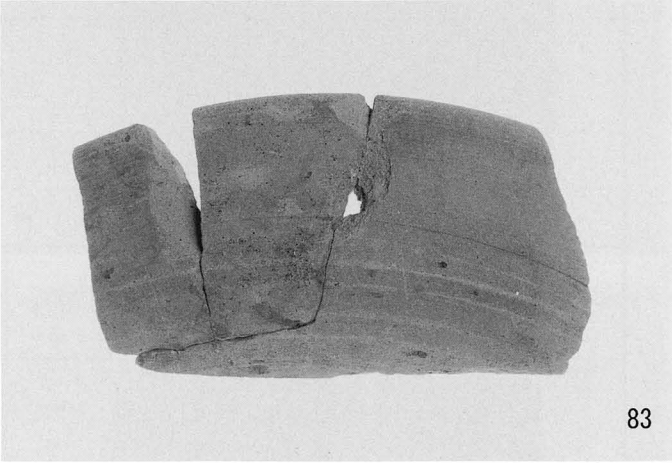
72

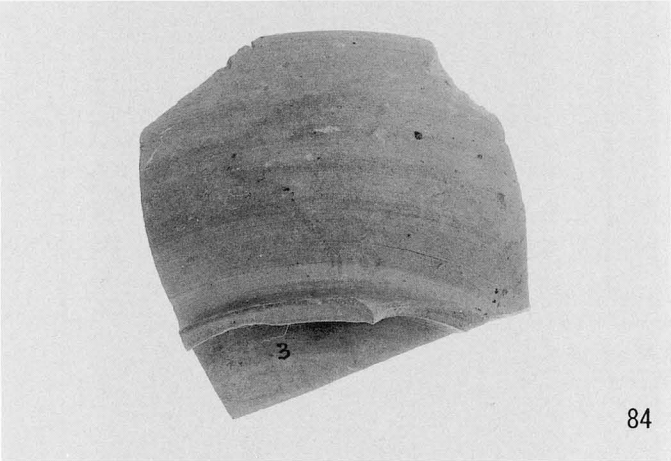
図版9　出土遺物(5)


76


77

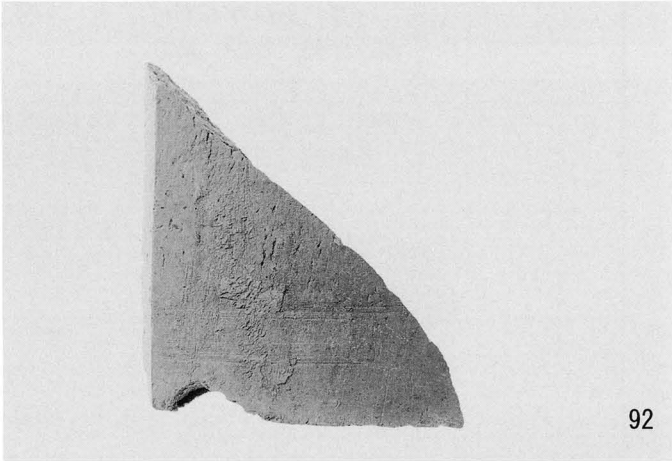
78


83


84

85

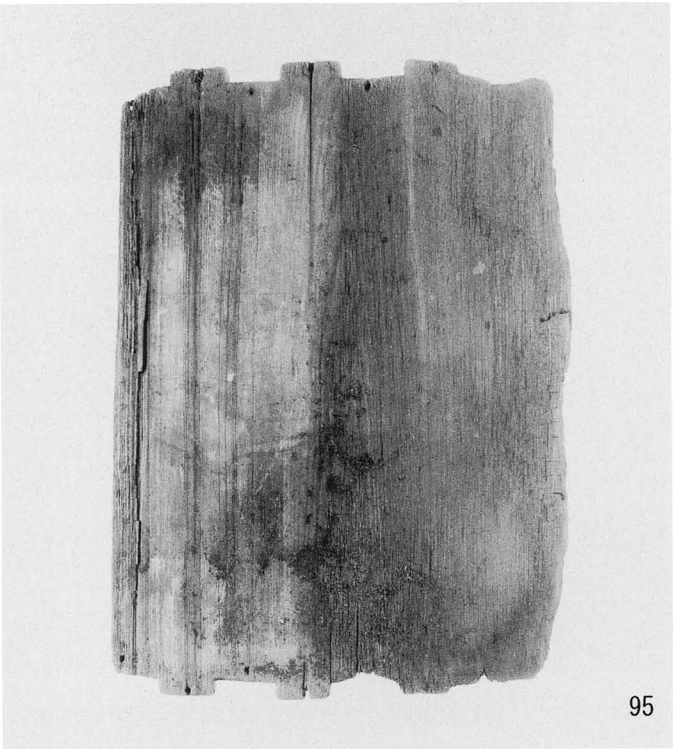
91


92

図版10　出土遺物(6)

93

94


95

96

100

104

報告書抄録

ふりがな	もとこいせき
書名	元粉遺跡 I
副書名	大阪産業大学桐蔭高等学校校舎建設に伴う発掘調査報告書
巻次	
シリーズ名	大東市埋蔵文化財調査報告
シリーズ番号	第19集
編著者名	中遠健一
編集機関	大東市教育委員会
所在地	〒574－8555　大阪府大東市谷川1－1－1　　TEL　072－872－2181
発行年月日	西暦2004年（平成16年）3月31日

所収遺跡名（ふりがな）	所在地（ふりがな）	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
元粉遺跡（もとこいせき）	大阪府大東市（おおさかふだいとうし）中垣内3丁目（なかがいと）	27218	5	34°42′17″	135°38′55″	19911111～19920303	1675㎡（実質約632㎡）	高等学校校舎建設

所収遺跡名（ふりがな）	種別	主な時期	主な遺構	主な遺物	特記事項
元粉遺跡（もとこいせき）	集落	縄文時代		後～晩期の土器片	
		弥生時代	中期前半の土坑	中期前半の壺、甕 石鏃、削器、楔形石器	
		古墳時代	中期の掘立柱建物２棟 中～後期の溝、土坑	土師器、須恵器、製塩土器、滑石製紡錘車	
		奈良時代	総柱の掘立柱建物１棟 井戸、土坑	土師器、須恵器、平瓦	
		中世以降	中世の土坑、柱穴 近世以降の水路	陶磁器、白磁、銭貨	

印刷物番号
１５－３６

大東市埋蔵文化財調査報告第19集

元 粉 遺 跡 Ⅰ

－大阪産業大学桐蔭高等学校校舎建設に伴う発掘調査報告書－

2004年3月31日発行

編集・発行　大東市教育委員会
〒574－8555　大東市谷川１丁目１番１号
TEL. 072－872－2181

印刷・製本　西村印刷株式会社
〒534－0021　大阪市都島区都島本通５丁目１５番３号
TEL. 06－6925－6555